

アジアの友

The Asia-no Tomo

12-1

DECEMBER-JANUARY

2012-2013

アジアの友 500号記念座談会
「穂積先生とABKの思い出」



新校舎の上棟式行われる

2013年1月15日(火)



2014年4月に開校を予定している新日本語学校・校舎の上棟式が1月15日(火) ABK 役員および工事請負業者である橘設計、小川組他担当者参加のもと執り行われました。また式の後には内部の見学が行われました。工事は予定通り進行しており、3月末の完成を予定しています。



アジアの友

2012年12 - 2013年1月号 第500号

目次

<表紙作品>

しあわせの環

『今の幸せを大切に、未来の幸せを頑張るって作る』がこの年賀状（作品）で伝えたい私の思いです。幸せそうな顔をしている白蛇を環にして、辰年が巳年が変わっても、続けて日本を守ることをイラストで表現しました。そして、日本の伝統的な色である赤と白の他に、環の中に松竹梅や出世桜などの縁起物を配置して、色豊かで楽しそうなお正月を描きました。

<作者>

羅 凱雋 (ラ ガイシュン、Lo Hoi Chun)

1986年香港生まれ

2009年10月財団法人アジア学生文化協会日本語コース入学。2011年4月専門学校 HAL 東京 (CG 学部・4年制) 入学。現在 HAL 東京 (CG 学部・4年制) 2年在学中

2012年7月『PLAYBUTTON デザインコンテスト』入賞・製品化、12月に本表紙作品で東日本大震災チャリティー企画『Yahoo! JAPAN 年賀状 学生デザインコンテスト 2013』入賞・商品化 (主催 株式会社博報堂アイ・スタジオ)

- 2 2013年新春のご挨拶
(財) アジア学生文化協会 理事長 小木曾友

「アジアの友」500号記念特集

- 4 「アジアの友」表紙の変遷
- 6 編集担当者がふりかえる「アジアの友」
 - ・「史子さんのこと」 小倉尚子
(関連コラム)「アジア文化会館の食堂」 小木曾史子
 - ・「アジアの友に携わって」 田中宏
 - ・「社会批判の精神無ければナンセンス」 工藤正司

- 18 座談会「穂積先生と ABK の思い出」

★参加者 小木曾 友 (アジア学生文化協会理事長)

ガ ル グ ヒ サ コ
雅留宮 久磨 (インド)

橋本 イスラム ヌルール (バングラデシュ)

グ ル ア ハ マ ム ム バ ハ ド ル ア ー セ ヴ ィ (アフガニスタン)

ホ ラ ス ノ リ プ ン (インドネシア)

- 34 寄稿「穂積先生とアジア文化会館の思い出」 石川 毅

私の意見私の体験

- 36 「日本の大学は3年で終わりですか？」
ヤップ ジャー ピン (マレーシア)

- 38 News & Events

- 42 知友会通信
- イベント情報

- MEMBERS

- 43 会費、ご寄付のご報告 (2012年10月、11月)

- 募金途中報告

- 44 ABK 同窓生募金 (2012年11月30日現在)

2013年 新

ABK同窓生募金 国別・地域別寄付金額 (2012年12月31日現在)

国・地域	件数	合計額	備考
日本	364	19,588,712	含、在外 / 同一人複数回
マレーシア	318	13,706,656	含、在外 / 同一人複数回 / 日本人 26 / シンガポール 1
タイ	51	6,856,007	内日本人 17
中国	42	2,455,000	含、在外 / 在日他
ベトナム	7	1,423,000	含、在日
ブラジル	14	657,627	
韓国	7	420,000	含、在日他
カンボジア	1	300,000	在日
シンガポール	8	380,140	含、在日
インド	7	190,000	含、在日

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

上記の表は、2012年12月31日現在の「ABK同窓生募金」に寄せられた寄付金の国・地域別総額です。2010年6月に、「1人1万円、1灯やがて万燈となるごとく」をモットーに始まった「ABK同窓生募金」は、東日本大震災・原発事故、タイ大洪水、ヨーロッパの経済危機、円高などの逆風にもかかわらず、「1波は万波を呼ぶ」運動となり、タイ、マレーシア、中国、ブラジル、日本など19か国・地域延1000人を超える同窓生（個人・団体）の皆様から、2012年12月末現在、46,772,142円のご寄付が寄せられ、2013年3月31日の締めまで最終目標の5000万円まであと一息というところまでできました。皆様の絶大なるご支援に対し、改めて心より御礼申し上げます。

春のご挨拶

国・地域	件数	合計額	備考
香港	4	170,000	
台湾	12	485,000	含、在日
ミャンマー	1	50,000	
バングラデシュ	2	40,000	含、在日
イラク	1	10,000	
インドネシア	1	10,000	
パキスタン	1	10,000	在日
ペルー	1	10,000	在日
ラオス	1	10,000	在日
合計	843	46,772,142	
	目標残	3,227,858	

お陰さまで、昨（2012）年9月には新しいA B K日本語学校（学校法人A B K学館）の新校舎の建設計画が東京都より承認され、本年3月末には竣工の予定です。その後、学校法人設立の本申請を都に対して行い、6月ころには認可が得られることを期待しています。

一方、財団法人アジア学生文化協会の公益法人への移行につきましても、本年中頃には内閣府への申請を行うべく準備をすすめております。

このように、本年は弊協会にとりまして文字通り正念場の時を迎えております。目標達成に向けて、内外の関係者の皆様には、一層のご支援・ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

(財) アジア学生文化協会
理事長 小木曾 友

お陰様で「アジアの友」は通巻 500 号となりました

アジア学生文化協会（ASCA）の機関誌として 1958 年に生まれた「アジアの友」は、およそ半世紀にわたりアジア・アフリカからの留学生・研修生をはじめとした在日外国人、関係者の声を伝えてまいりました。当初 ASCA の機関誌としては季刊誌「アジアの友」と月刊誌「会報」の二本立てでいく予定でしたが、季刊誌 2 号、月刊誌 1 号が発行された後二つは統合。月刊誌の 2 号に「アジアの友」の名が付けられ、今号で通巻 500 号の発行を迎えるに至りました。今回は 500 号発行を記念して過去の表紙を振り返るとともに、初期の編集担当者による思い出コラムと、留学生 OB による座談会の模様をお届けします。

「アジアの友」表紙の変遷



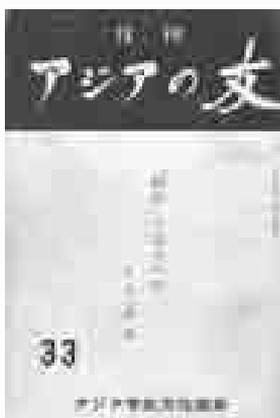
創刊号（1958 年 9 月） B5 版 2 色刷。題字は穂積五一初代理事長による揮毫



創刊号の発刊はアジア文化会館建設前で、当時の岸首相より、会館建設への期待の言葉が寄せられた。なお第 2 号発行は会館完成後の 1960 年 9 月となる



1960 年 9 月会報として定期刊行がスタート。B5 版・黒 1 色に横組みの簡素なデザインだった



1966 年 3 月号 (No.33) ～、A5 版・2 色。本文は縦組となり、段組による割付がされて本らしい体裁となる



1988 年 4 月号 (No.262) ～、B5 版・2 色。サイズが大きくなるとともに表紙に写真やイラストが掲載される。本文は横組に変更された



1992年7・8月号(No.302)～、B5版・2色。タイトル部分を中心にマイナーチェンジ



1996年9月号(No.348)～、B5版・4色。この号より日本宝くじ協会様の助成をいただけることとなり、カラー化された



1997年4月号(No.354)～、B5版・4色。躍動するアジアを多彩なカラーとデザインで表現した



1998年4月号(No.364)～、B5版・4色。インドネシアの留学生ヘリ・フドラシヤ・イマ・ファティマさんの作品「アジアのダイナミズム」が長期にわたり採用された。また、2001年4月号(No.394)よりそれまでのB5サイズから現在の変形サイズに小型化された



2003年9月号(No.418)～、B5変形版・4色。アジアをフィールドに活躍する写真作家の方の作品が表紙に。作品は毎月差し替えとなり、各年度お一人、計5人の作家の方に御担当いただいた



2008年4月号～、B5変形版・4色。主に美術系分野の現役留学生やOBより作品を御提供いただき、毎月差替で掲載した



2010年4月号(No.484)～、B5変形版・4色。アジア文化会館およびABK日本語学校の行事写真を毎月差替で掲載。発行が月刊から隔月刊に変更となる

編集担当者がふりかえる「アジアの友」

初期の「アジアの友」の編集を担当した元職員に、当時の苦労話や、これからの本誌に対する期待などを綴っていただきました。

史子さんのこと

小倉 尚子

(初代編集者 1960年～1963年在職)

東大正門まえに、自治制の寮（新星学寮；アジア文化会館の母体）があって、今年度から女子学生も入れるそうだという情報が入り、早速応募することにした。1953年、昭和28年のことである。幸い中林寮長の面接にパスして、橋本玲子さんと二人、第一回女子寮生になった。

当時の寮は、吹き通しの廊下、奥の食堂へ渡る廊下は歩くときしんだ。住人は、穂積先生夫妻とナポちゃん（長男一成さん）、明子さん、田井重治、直民兄弟、永田隆彦さん、川崎堅雄さん一家に、寮生は何人だったか。一室に二人ずつ。食事は、当番制の自炊だった。当時の食費は一人当たり、15円、これで朝と晩を賄うのは当時でも工夫を要した。魚の切り身を買うと一切れ10円、森川町の八百屋で、たくあん漬けの大根の葉を貰ってきて、味噌汁の具にしたりした。というのが、1950年代前半の

新星学寮。

私は昭和30年に農学部を卒業して、なんとなく大学院に残ったが、寮は学部学生のみということで、肴町の三帖間に越した。でも近いので、寮には始終出入りしていた。大久保さんの事件（*）でも、谷川へ行った覚えがある。（最初は谷川か天城山かと二つの説があった）。小木曾友さん〔現（財）アジア学生文化協会理事長、東京大学農学部農芸化学修士卒〕の入寮はこの頃ではなかっただろうか。同じ農学部と言うことで、なんとなく親しみを感じていたのだが、大変真面目な勉強家と言う印象をもったものだ。

そのうちアジア文化会館（ABK）建設の話が具体化してきて、東大龍岡門近くの仮事務所には、寮のOB諸兄が机を並べた。丁度60年安保改正反対の最中で、デモの合間に時々顔をだした覚えがある。

新しい財団の広報のために会報を出そうと言うことで、寮友の誰彼の記事やら会館建設資金の募金状況やらをのせて、永田さんのガリ版で会報「アジアの友」No.1 (1960年9月25日発行) を発刊。〔会報「アジアの友」は、その後タイプ印刷になり No.32 (1965年12月発行) まで発刊される。1966年3月から「月刊アジアの友」として装い新たになる。〕

いよいよ会館の建設が始まり、形ができてきたので、記念号を出すことになった。これは色刷りの本格的な印刷で、広告集めもなれない者には一仕事だった。最後の校正は、永田さん始め、全員徹夜だった。その意気を感じて、印刷や(三映印刷)の社長が、バーに招待してくれて、初めてコニャックの味を知った。

財団の最初の行事は北海道旅行ではなかったろうか。第一回目は1958年7-8月だった。それが大成功だったので、第二回目をとということで、1960年に二回目があった。このときは私も同行を許され、よい思いでとなった。参加者のなかの劉彩品と親しくなり、未だにつきあいがつづいている。彼女が部屋を借りていたお寺が近かったので、始終往来したし、新星学寮にもつれていった。漱石の(虞美人草)に知己と言う言葉があるが、彼女はこの意味で、穂積先生の知己になったのではあるまいか。

さて会館は1960年に住人が入り、留学生と日本人学生が住むようになっていた。その中に元寮生で、当時は農芸化学の院生の



小木曾史子さん(左)と筆者

小木曾友さんがいた。彼は寮時代のとおりに、大変真面目な勉強家で、朝は早くから、夜は遅くまで、実験室で働き、会館は寝るだけと言う生活だった。

当時は住人がいるのだから、食堂は始めていたが、なにぶん素人の集まり、食習慣の様々な国の人々の集まりの食堂は容易ではない。それで栄養短大(女子栄養短期大学)の先生をお願いして、ご指導していただいた。しかし、いつまでもお願いしているわけにはいかず、食堂の責任者を見つけることはかなり急務になっていた。生来のお節介で、私には、一人思い当たる人があった。

前記のとおり、私は肴町の三帖間を借りていたのだが、同じ家の二階を借りている女性と口を利くようになった。ある日彼女の言うことに、従姉で、女子医大の食堂で栄養士をしているのがいる、彼女が遊びに来るから、一緒にお茶をのみにこいという。それが、木内史子さんに会った最初である。

あくまでも優しく、穏やかで芯は強い人柄に惹かれ、彼女の借りている部屋が農学部に近いこともあって、その後度々お邪魔するようになった。心当たりは勿論彼女。

穂積先生にその話をしたら、何も言わないで「一度会館につれてきなさい。」といわれた。丁度1960年9月の開館の直前、前総理も招待して、華々しい開館だったので、史子さんには「人手が足りないから手伝ってくれないか」とか何とかいったのだったか。そして先生に史子さんを紹介した。その短い会見で、おめがねにかなったのか、それから約1年半後、前任の食堂主任の退職を承けて史子さんをお願いすることになった。先生は、「こういうときにはタクシーは駄目、ハイヤーを呼べ」とおっしゃって、女子医大学長宅へ史子さんを貰うけにいらした。

そして、史子さんは、食堂主任の大任をはたすことになった。一応のスタッフはそろっていたのだが、住人は多国籍、食習慣も様々、ずいぶん大変だったろうと思う。でも史子さんは良くこなした。留学生たちも協力的だった。中には料理のアイデアやこしらえ方を教える人もいた。香港の曹さん（曹基鏞さん）は豚肉の生姜焼きを提案して、翌日から、メニューのひとつになった。私も未だに生姜を欠かさず、良い豚肉があると、生姜醤油に漬けて焼く。いつからか会館に棲みついた野良犬のバタコも食堂の人に言われて、夜遅く帰る史子さんを、電車通りまで送っていくようになった。

そんな雰囲気の中で、勤勉そのものの小木曾友さんの会館への帰りがだんだん早くなり、なにくれとなく食堂の手伝いをする、そのうちバタコのかわりに史子さんのエスコートを勤める。その後の話はここで書くこともなからう。

そのうち私は会館のおかげでエジプトに留学することになった。63年はじめのこと。発つ前に、友さんと史子さんが当時流行ったバイキング料理によんでくださった。その折、私は「こんな奥さんは鐘と太鼓で探したって見つかるものじゃない」といったら友さんは「小倉さんもそう思うか」とうれしそうなので、安心して日本を出た。

その史子さんが亡くなって、友さんはどうなるかと心配した。しかし、先日『啄木と昴とアジア』という友さんと史子さんの文集を読み、いたく感動。史子さんは友さんの中で生きているということを感じた。これだから『同行二人』で友さんはやっていけるという感を深くした。

日本は一人の土壤学者を失ったけれど、余人を以って代え難いアジアと日本の架け橋をえた。

(*) 大久保さん事件：寮生で学習院大学に通っていた大久保武道さんと大学で同級生であった満州国皇帝・愛新覚羅溥儀の実弟溥傑の長女愛新覚羅慧生さんが、1957年12月4日天城山山中で心中した事件。

(関連コラム)

アジア文化会館の食堂

小木曾史子

昭和35年7月、会館新築と同時に発足した食堂も、早いもので、もう2年の歴史をもつようになりました。

食堂経営には、殆ど未経験な若い女性ばかりでしたけれど、遠く故国を離れて、食習慣の全く異なった日本にいらした方々に、何とかさびしい思いをなさらず食事を楽しんでいただきたい、その一心で手探りながら、一步一步ここまで歩いてきました。

現在、会館の食堂利用者は、1日平均、朝食約70人、昼食60人、夕食70～80人、土、日は、遊びに外出なさったり、反対にお客様をつれていらっしゃる方が重なったりで特に変動が激しく、多いときには100人を超えることもあります。

食事時間は、朝食7時～8時半、昼食12時～1時半、夕食6時～8時となっております。朝食は、トーストに牛乳やミルクコーヒーの方が多くはありますが、その外にコンフレック、オートミール、各種卵料理（主にポイルドエッグ、フライドエッグ、オムレツ、ハムエッグ、ベーコンエッグ等）野菜ソテー、少数ですが、ポーク、ビーフを召し上がる方があります。また、主に日本人学生や職員の方達は、御飯にみそ汁と簡単な一品料理、梅干といった定食も欠かせません。

朝食は7時からですが、学校や工場研修

をひかえて急がれる方が多いので、トースターの故障、人員の不足などで一寸手順が狂いますと、瞬く間にお盆がずらりと並び、その後にも、又、人垣、その方々が皆、時計をみつめながらイライラしていらっしゃると思うと、カウンターに立つ私達もボーっとしてしまう程です。その中でこちらは熱いミルク、こちらは冷たいミルク、あの方の目玉はオーバーフライ、この方のポイルドエッグはハーフポイル、と個人個人の嗜好を細かく見分けて、間違いなく、素早く出すには、かなりの熟練を必要といたします。卵料理では、オムレツに一番特徴があるようです。一般に、日本のオムレツは、半熟状態の柔らかいのが賞味されますが、東南アジアの方は、よく火の通ったものを好む方が多いのです。（お魚やお肉も同様です。）そのためか、形も日本のような木の葉型でなく、フライパンの大きさのままに、丸くひろがったものを裏返して焼き上げます。少しでも柔らかい所が残っていると、もう一度フライして下さい、といわれます。中に入れるものも、オニオンという方、チリをという方、いろいろ好みも異なっています。

昼食、夕食は（A）、（B）、（C）の定食を出しております。（A）定食は、スープ、ライス付きで120～140円。大体週に一度マトンをします。これは特に回教の方のために、お祈りをしてあるお肉をとどけてもらっています。チキンはヴェジタリアン以外の方は食べられるので週に5回そして牛3回、豚2回、海老2回、魚1～2回の予定で献立を組みます。（B）は、80～90円、（C）



は、主にみそスープでライスと共に60円内外、その他に、昼は(D)として、麺類(月見うどん、月見そば、きつねうどん、五目うどん、ラーメン、冷やしそば、冷麦、湯麺、カレーうどん、鴨南蛮等)、館内の日本人職員のために用意いたしますが、外人でも、好んで食べる方もございます。夜の(D)は、サラダ、精進湯等、主に野菜の一品料理を出しております。それでも定食が好みに合わなかったり、不足したりしますと、ピフテキ、ポークソテー、或は野菜とポーク又はビーフの炒めもの、卵料理、炒飯等と、オーダーがふえて、レンジの前に立つ人は息つく間もない程の忙がしさになります。炒飯も一応誰でも食べられるようなものを用意しておくのですが、中に入れるものに、それぞれの好みがあって、オニオンは必ず入れてという方、入れては困る方、卵のみ、野菜と卵その上にポーク又はビーフを入れる方、こうなると一度にまとめて作ることが出来ないで、大変時間がかかります。予約制でないで、どうしたら、定食を過不足なく仕込み、オーダーの数を減らすことが出来るかに頭を悩まし、献立や調理に苦心します。又、出来るかぎり(E)

として、デザートを常時作っておくよう心がけております。これは、特にヴェジタリアンの方や、来客の場合などに喜ばれます。主にプディング類、ゼリー類、フルーツポンチ類です。

その外に、毎食必ず用意する特殊なものとしては、野菜カレー、野菜フライ、炒飯等です。又、真赤な唐辛子に生トマト、にんにく、玉葱を入れてミキサーでどろどろにし、それを塩、味の素で調味し、ピーナツ油で炒めて作った「サンバル」も欠かせない一品です。切らした時など気の毒でお断りするのにながら心が痛みます。それをそのまま、御飯にのせたり、みそスープや他の料理につけて食べていらっしやるようです。非常に刺激が強く、「サンバル」を作った容器を洗っただけで、眼や口のまわりがひりひりする程です。食物はどれも同じ、とおっしゃる方もありますが、食品材料は似たものがあったとしても、食べたいというのは、民族や宗教、気候風土や習慣の相違でこんなにもちがってくるものかと驚かされます。

定食以外、ジュース類、コーラ類、牛乳、ヨーグルト、コーヒー、紅茶等の飲物、それに季節の果物、デザート等は、食事時間外(但午前7時~午後9時)にも出しております。

この食堂は、独立採算のため前になっており、人件費から、光熱、ガス、水道をはじめ、一般備品から消耗品まで、すべてを賄ってゆかなければなりませんので、他の留学生会館の食堂のように、人件費、光熱、

水道等の補助があって、純材料費だけで食事を出せる所と較べると、どうしても、割り高になります。それは、理解していただいても較べれば高い事には変わりないので、作る私達としても大変苦勞いたします。出来るだけ人件費を少なくするために、在館の方々にも協力していただき、開館当初から、カフェテリア方式を採り、食事はすべてセルフサービスにしております。現在の広さは、厨房 75.1 平米、食堂 209.67 平米、ますます殖える利用者に対して、余裕ある広さといえませんが、今年 6 月、待望の冷凍室も出来ましたので、食品の保存がよく、ケース単位の計画購入も可能になり、飲物、フルーツ、デザート、サラダ等も冷たいのを味わっていただけるので、暑さの烈しい夏の間は特によろこばれました。食堂に続いて 18.936 平米の特別食堂があり、これは、主に研修生の会食（歓迎会、研修修了式等）

や、座談会・中間検討会等のお茶の会に使われます。時には、留学生、研修生のお客様の会食にも使用されます。最近では研修生のコースが殖えて、2 日一度の割合で、会食やお茶の会が開かれるようになりました。在館者の殖えたところへ、会食の回数も多くなり、限られた設備と、少ないスタッフではなかなか十分な事は出来ないのですが、研修協会や文化協会の方々の方々の協力の下に頑張っております。

どこでもある事かもしれませんが厨房内にはいって、自分の好きな料理をつくりたいという方があります。特に宗教上、お祈りのすんだチキンやマトンしか食べられない方や、どうしても定食や、限られたオー

ダーにあきたらなくて、好みのものを自分で調理なさるのです。思い思いの材料を整えて、2、3 人グループになって作る場合が多いようです。そんな場合は、珍しい材料の扱い方や、調味料の加減を教えていただいたり、その味を味わわせてもらったりしています。

目の前で講習を受けるようなものですかから、大変参考になり、有難いチャンスでもあるわけですが、現在、厨房内には、炊飯器を除いては、5 つしかレンジがなく、その 5 つで 4 つの定食に汁二種類その他ヴェジタリアンのための野菜カレー、炒飯、野菜ソテーを準備しなければなりませんので、あるだけのレンジをフルに使用しても、まだ足りないことが多いので、その上に個々の調理希望者が現れますと、お互いに思うようにならず、肝心の定食に支障を来し、多くの方に迷惑をかけることになって了います。そこで協議の結果、厨房利用は、午後 2 時～4 時の厨房内の空時間に限ること、事前に申込用紙で申し込んでいただくことになりました。全然お断りするのは、折角の楽しみを取り上げてしまうようで、食堂としても大変辛く、自由に調理が出来るコーナー又はそんな一室を作る案も、前々からあるのですが、まだ実現に至らない現在では、限られた時間内での調理で我慢していただいています。この頃は、使った器具類を洗って行く方が多くなりました。忘れて行く方には、理由をお話し、きちんとして下さるようお願いしています。

今、ここアジア文化会館の中には約 30 か

国の国の方が泊っています。同じ国でも広い国では地方によってそれぞれ料理の特質があります。同じインドの野菜カレーでも北と南では材料から異なり、北の方は、ポテト類を入れてとろみのあるものを、南の方は、大根などもつかい、サラッとした仕上げのものを、好まれるようです。また私達に教えて下さる方によっても銘々ちがいが出て参ります。一方の方から、今日のは大変美味しいと喜ばれるかと思うと別の方から、こんなカレー、見たこともない、など云われることもあり、作る方でも悩みます。けれど、同じ日本の中でも、地方によって特色があり、同じ地方でも、細かく云えば、各家庭の習慣、その家に伝わる伝統のようなものがありましょ。又、年代によってもその違いは大きいものと思います。味覚は、個人差が大きい。まして、こんなにいろいろな国の、それも一度も行ったことのない国の様々の方の食事をあずかり、すべての人に満足してもらおうと思うのが無理な話。とってしまえば、少しは、心が安まりますけれど、やはり、生まれ育った国をはなれ、ことばも習慣も全く異なった中で、食事が安心してたべられるか、そうでないかは、大きな問題と思い直して、努力しております。

日本へ来られて、積極的に日本のものを取り入れて、自分の味覚にあったものを探す方と、多くは宗教の為と申すけれども、今までの食習慣を厳しく守る方の二通りがあるように思われます。前の方には、なるべく日本料理にも親しんでいただける様に、あちら風に香辛料を加えたりして、工夫し

ます。あとの方には食事が合わないために日本にすることが一層さびしい思いをおかけしない様、出来るだけ今までたべていらした材料と味に近いものを調えるよう努力しております。ヴェジタリアンの中には卵は勿論チーズもたべない方があります。

その方々は数多い雑多な食べ物の中からこれだけはどうにか安心してたべられるというものを探し出してあげると、毎食それを召し上げる方もあります。もう印度に帰られましたがお豆腐一丁をそのまま、必ず日課のようにたべた方がありました。宗教上豚を食べない方は、会館の外ではお魚でもラードで揚げてある時があるので、安心しては食べられないと、必ず予約のチケットをおいていらっしゃる方もあります。

そんな事情ですので、私達は一層、責任を感じ、どうにかして信頼に応えたいと思います。すべての方に、一度に満足していただくことは、とても不可能ですが、せめて、週に一度位は、ああ、なつかしい料理だな、美味しかったと心から満足していただけるように、各国の特色ある料理を順番に献立にのせることが出来たらと考えます。

開館2年、素人ばかりで始まった創生期の苦しみは終わったといっても、まだ、よちよち歩きです。確実に、一人歩きが出来るように皆様のたのしい食堂となるように、利用する方とのよい協力関係の中で、今後とも育ててゆきたいと思ひます。

(『研修』 海外技術者研修協会 1962・12)

「アジアの友」に携わって

田中 宏

(1962年～1972年在職)

私がABKに入ったのは1962年春で、退職が1972年春なので、約10年間在職したことになる。「アジアの友」の編集に係わるなかでまず思い出すのは、やはり瀬川保さん(司馬遼太郎さんの友人で産経新聞の記者だった方)の存在である。それまでのB5版のタイプ印刷のものを、雑誌としての体裁と内容に“大変身”させて下さった。第33号(1966年3月刊)からひと回り小さいA5版に変えて縦書きとなり、「巻頭言」欄を設け、穂積先生にその執筆をたのむことにされた。また、題字の「アジアの友」を先生に揮毫してもらったのも瀬川さんのアイデアだった。たしか何枚も何枚も書いてもらい、最終的なものは瀬川さんが決定したと思う。そういう意味からも、現在は中扉に入っている先生の揮毫を表紙に登場させ、それが穂積先生のものであることもどこかに掲げてほしい。

先生はいきおい、毎号、巻頭言を書くことを余儀なくされることになる。先生の文章では「仮名遣い」は「歴史的仮名遣い」に固執された。占領軍にいわれて、唯々諾々と変更するわけにはいかない、という主張だった。そうは言っても、先生もやや不安なところがあるということで、私は部厚い『新潮国語辞典』を片手に確認をしながら作業を進めた。また、他の原稿がそ

ろって巻頭言だけがまだという時には、先生に話を聞きそれを文章にして手を入れて頂いたことも時

にはあった。先生の没後に編まれた『内観録』(1983年刊)にはその巻頭言がすべて収められており、その分量もかなりの部分を占めている。これも瀬川さんの「功績」といえるかも知れない。

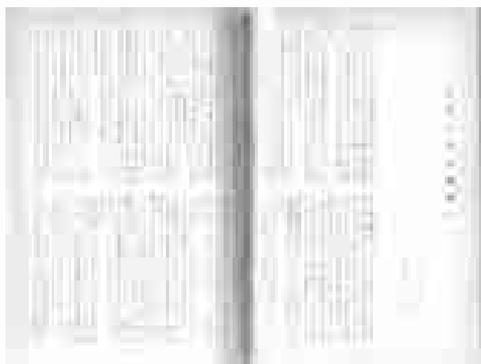
瀬川さんはプロだけあって、タイプ印刷の「会報アジアの友」を雑誌型の「月刊アジアの友」に変えただけでなく、送料が節約できる「第三種郵便」がとれる内容をめざされ、1966(昭41)年11月、その認可が実現した。毎月の発刊が必須となり、毎回、宛名用のガリ版に小さなロールで宛名を一枚一枚印刷して、本郷郵便局に運び込んだ日々が懐かしい。「アジアの友」の定期発行は大変だったが、それが「寮友」とのパイプとなり、納めてもらう会費への「見返り？」ともなったように思う。そういうこともあって、誌面には、「寮だより」「会館だより」や「協会日誌」が設けられてい



た。また、時々の留学生に関連する事件や問題をとりあげたが、それが寮友以外の留学生関係者にも読まれるようになり、誌友がひろがったように思う。

瀬川さんは、当初「随想」欄としてスタートさせたものに、途中から「一点鐘」との名を付けられた(42号〈1967年3月号〉から)。そのコラムは誰が書いたか今となってはわからないようだ。先日、会館を訪ねてバックナンバーをめくって見ると、「一点鐘」の文末に「烏城」とあるものがあったが、これは私だと思う。私の出身地岡山の城は別名「烏城」だったのでそれを使ったのである。瀬川さんの真骨頂のあらわれの一つが「一点鐘」を生んだともいえる。

先生の口述を書きとって、それに手を入れてもらって巻頭言としたこともあるとときに書いた。実は、もう一つ同じような方式で文章化した忘れられないものがある。在館生の一人であるアフリカのアンゴラ出身のレモスさんが病気で亡くなったのは1966年10月のことである。当時のアンゴラはポルトガルの植民地で、民族解放の武力闘争が展開されていた。レモスさんの死には、アジア・アフリカの青年たちは特別な思いを寄せていた。私は、その「思い」を何とか文章化して誌面化したいと考え、何人もの在館生に依頼したが執筆となるとなかなか難しい。結局、ヘンフチョンさん(マラヤ留学生・東大)の部屋に入り込んで、彼のレモスさんへの熱い思いを聞きとり、それを私なりに文章化し、彼に校閲してもらって紙面に掲げることができた。ヘンフチョン「悲運の友の墓標に」(「アジア



1966年12月号(No.39)より

の友」、39号1966年12月号所収)がそれである。民族の独立、解放へのアジア・アフリカの青年に通底する熱いものが盛り込まれていたように思う。同じ号に、インドのジャガナタ・ラオさんも「故レモス君に捧げる」を寄せている。

レモス君が都立駒込病院でなくなった時、ごく事務的に火葬の手続きを進めようとしたところ、多くの在館生がぜったいに火葬にだけはすべきでない、もし将来遺族と連絡がついた時、火葬にしたと聞いたら驚くかもしれない、という。しかし、東京では土葬にすることはできない規則になっていて、ほとんど困り果てたのである。そうこうしている内に、エジプト人留学生があちこち連絡をとり山梨の塩山の文殊院に回教徒のための墓地が確保されていることを突きとめ、回教徒ではないが特別の許可を得てくれたのである。翌日、町屋の火葬場に行くのをとりやめ、車で塩山まで遺体を運び、当時は中央高速もなく、現地に着いたのは夕方、夕焼けを背景に遺体を静かに土に返してホッとしたことを昨日のように思いだす。その光景はアフリカの大地

に埋葬するかのようだった。享年 26 歳。

当時と状況は異なるかもしれないが、昨今の日本及び東アジアの状況には多くの問題が横たわっている。「一点鐘」のようなコラムを設けて、在館生やその OB・OG の在日する人に、匿名でも発言してもらう場を設けたらどうだろう。日中関係、日韓関係、日本の状況などについて、貴重な意見が聞けそうに思うがどうだろう。昔の在館生で帰国後かなりの時間がたって再来日した人々のインタビュー記事には仲々興味深いものがある。在日の OB・OG の人々に、

日本の現状なり、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの現状なり、そこと日本との関係などについて、率直な意見を書いてもらうなり、インタビュー記事を載せたらどうだろう。そこに、日本人の OB・OG を加えることも考えてもいいかもしれない。前にも触れたが、やはり、新星学寮、アジア文化会館、そして日本語学校の日誌的なものを記録として残すことが必要ではなからうか。

当時の思い出を綴り、若干の提案も加えて小文を閉じたい。

社会批判の精神無ければナンセンス

工藤正司

(在職期間 1968 年 4 月～1975 年 3 月、1977 年 6 月～2012 年 5 月)

私が入社（財団法人アジア学生文化協会）に入社したのは 1968（S.43）年の 3 月だった。入社前に帰省しておこうと思って、3 月中頃職員にその旨伝えに行った。そうしたら、当時職員だった田中宏さんが、「いつ帰って来るの？」と聞くので、「3 月 25 日頃」と応えた。そうしたら、すごいパンチを食らった。『ごろ』とは何だ!! 25 日より遅くても、いつでもいいが、仕事をするのなら、はっきり『何月何日』でなければならぬ。」と言うのだった。私は「マイッタ」と思った。それで、「もっといたら、4 月からでも

いいだろう。」とせがむ母を押し切って 25 日に ABK（アジア文化会館）に戻って入社したのである。

仕事を始めて一番恐かったのは電話が鳴ることだった。自分の目の前で鳴っている電話を先輩職員にまかせるわけにもいかない。大学の 4 年生と大学院修士の計 3 年間を ABK で過ごした私は、職員の管理のズボラさをいつも批判し、電話も交換台に休日毎に日本人学生仲間の当番制で、ボランティアで座っていたから、ABK は自分の家みたいなもので、電話もお手のものだったはず

だが、職員として世の中に通用する受け応えは訓練できていなかったから、職員に囲まれた中で電話に出て、「何だ、その話し方は!!」とやられるはしまいかと、びくびくだったのである。

当時は、千代田博明さんが、まだア文協におられて、「工藤君、これやってみて」と仕事が回ってきた。それらの紹介は別の機会に譲って、明治百年関連に触れよう。私の入職した年が明治百年に当たっていたのと、『アジアの友』とも関連するから。

ア文協は、日本ユネスコ協会連盟と共催で、明治百年をどうとらえるかについて懸賞論文をアジアの留学生に募っていた。小木曾友さんが担当で、既に優秀賞等入選者は決まっていた。ただ、入選者等で明治維新ゆかりの地を巡る旅行行事が残っていた。それに、小木曾さんと共に、私と新星学寮（ABK 設立の母体となった学生寮）の日本人寮生三人がついて回るようになったのである。明治維新の精神的支柱の吉田松陰の郷里山口県萩に松下村塾も訪ねた。初日にセミナーが組まれていて、何人かの先生が明治維新にちなむ歴史の講演をされた。最初は、東京学芸大学教授の小沢栄一先生の「日本の近代化と明治維新」で、質疑応答に入ると、真先に留学生から「近代化」を何で測るかについて提案があった。「西欧の国家形態を基本尺とするのではなく、『人民の主権の拡大・深化』で見べきではないか」というのであった。この提案は、このセミナー・旅行行事の成果を決定したとも言えた。第二回目の講義は、東大の教授衛藤藩吉先生の「アジア近代史における明治維新

の役割」であった。先生は、どちらかと言えば、アジアにとって明治維新が役に立った面を探ろうとする視点から、政府は自国の利益しか考えないから常に当てにならないが、民間人の中には、当てになる者がいるとして、具体的人物をあげて説明するのに多くの時間を費やした。ただ、日本と他のアジア諸国が西欧の進出に対して示した違いを、西欧の進出を「許容」したか、「拒否」したかにあったとした。この論は、留学生に大きな議論のテーマを与えることになった。西欧の近代化は、他を侵略してのものであり、日本もそうであった。では、アジアはどこを侵略すればよいというのか？先生の論に従えば、弱肉強食の論にならざるを得ないではないかというのであった。

『アジアの友』（昭和43年6月号、第56号）に、私がこの件を報告した。そして、翌月号（第57号）に、留学生の旅行参加の感想文が載った。すると、衛藤先生から、先生の言い分も載せるようにと抗議があった。確かに、留学生の反応の報告だけでは片手落ちと思われたので、先生の真意を知りたいと、杉並区久我山に先生のご自宅を訪ね、次号に先生の講義録を載せた。（第58号）その何年か後、『アジアの友』の編集を、田中さんから引き継いだ。田中さんが、愛知県立大学の先生になって、ア文協から去ったからである。それにしてもア文協は人材を、惜し気もなく他に放出してきたものだと思う。退職者を別にして、田中さんと同じ頃柳瀬修三さんをタイ TPA（泰日経済技術振興協会）の立ち上げ支援に出向させた（柳瀬さんは出向終了後もタイに残って、国

籍は日本だがタイの人となった。タイに往く人で彼のお世話にならない人は殆どない。)のを皮切りに、千代田さんを AOTS [(財)海外技術者研修協会]の事務局長に(千代田さんは AOTS 崩壊を救い、現在弁護士として自活の道を歩んでいる。)、長谷川義春さんを日中友好会館の求めに応じて移籍(現在ベトナム在住)、また、柄原暁さんは東大留学生センター教授に(2011年逝去)。それに現在ア文協に戻っているが、佃吉一さんを'70年台から30年近くJTECS [(社)日・タイ経済協力協会]に出向させ、(その間タイのTPAに二度も出向させた。)白石勝己さんを約5年間TPAに赴任させ、布施知子さんを3年以上TPAに赴任させ、帰国後、JTECSに7年近く出向させた。そういう中でア文協はよくもったものだと思う。

さて、私の『アジアの友』編集当時に移ると、読者の一部から「反日的」だと幾度かお叱りを受けた。当時日本は、マスコミも「日本ほど、自分がどう見られているか気にする国はない。」と書き立てていた。他からの批判を気にして、良く受け止めていたのである。自らの欠点克服に努めることは、発展の要点に違いない。『アジアの友』も、アジアの視点で見よう、日本だけで通用する内向きの議論ではダメだと論陣を張っていたから、一部には「日本を批判する『反日誌』」と見た人もいたかもしれない。1970年代、80年代のことである。

それが今はどうだろう。マスコミははじめあらゆる言論界が日本の衰退を言っている。若年人口の減少、産業の空洞化、貿易収支

の赤字への転落等々。そして、何と云っても、終身雇用制等、上昇期の日本が特徴としていた文化の否定である。他方、論調はどうかと言えば、他に耳を傾ける余裕等無く、自らを誉めちぎり、他の欠点を挙げつらうのに汲々としてはいはしまいか。他と自を敵・身方に分け、身方を誇り、敵を罵倒する単純な構図に陥っているとすれば情けない。こうなると、自らの自己矛盾や欠点を指摘するだけで利敵行為とみなしてしまう。他に学ぶことなど論外で「敵を知る」ことさえ許さなくなる(戦時中が「鬼畜米英」と英語を学ぶことを禁じる等、そうだった)。これで、日本の復興は本当にできるのか?近年の国内の就職難も重なって、若者が海外に職を求め(「セカ就」)、「やりがいがある。日本はつまらない。」と言っていると伝えられているではないか。

自らを自慢し、他をけなして溜飲を下げていても、自分がよりましたになるわけでもないから、自らの発展は望むべくもない。結局、「学ぶこと多き者が勝利する。」のであってみれば、これを阻害する風潮を破らねばならない。『アジアの友』は、もっともっとアジアを知るためにアジアの視点で、日本社会を批判的に見たらいいと思う。「反日的」のお叱りを恐れ日本だけで通用する論調に迎合してはナンセンスである。ABKの創設者は、ABKは「アジアの独立と繁栄のためのもの」と言っている。本論も、「日本の復興」を論旨にしているようでは、それとは道遠しではあるが、いつの日か創設者の呼びかけに合流できる道を歩み続けねばならない。

「アジアの友」500号記念座談会

穂積先生とABKの思い出



小木曾 友 (アジア学生文化協会理事長)

ガ ル グ ヒサマロ
雅留宮 久磨 (インド)

橋本 イスラム ヌルール (バングラデシュ)

グ ル アハマ ッド バハド ル アーセフ ァイ (アフガニスタン)

ホラス ノラナン (インドネシア)

共生の素晴らしさを若い世代に

編集部 みなさまお久しぶりです。今日は、日本留学後さまざまな事情で日本に長く暮らし仕事を続けておられる4名の方にお集まりいただき、また、1960年にアジア文化会館(ABK)ができた時、日本人学生として入館してから今日までABK一筋で人生を送られてきた小木曾友(財)アジア学生文化協会理事長に加わっていただき、久々に穂積先生のこと、ABK在館中の思い出などについてお話を伺いたいと思います。それではまず、小木曾さんからお願いいたします。

小木曾 穂積先生が一番はじめに考えたのは、このABKはもちろん留学生のための宿舎ということが第一ですが、日本人の学生も一緒に住むということが絶対に必要だと

考えたんですね。というのは、お互いが本当に仲良くなるためには共同生活が一番だと。それは穂積先生が新星学寮で経験したことをABKでもやりましょうということでした。もう一つは、通産省(当時)の要請によってAOTS(海外技術者研修協会)を作ることになり、技術研修生も一緒にここで生活するということになりました。これは今から考えるととても大きな意味があった。学生はまだ社会に出ていない勉強中の人ですが、研修生はもう自分の国で学校を出て、社会で働いている人たちで、タイだったらタイの社会のことをそのまま持ち込んでくるような人たちですよ。ABKで留学生と研修生と日本人学生が「同じ釜の飯を食う」(一緒に生活する)ことになった、これが結果として、アジア、アフリカ、中南米に帰国留

学生・研修生の同窓会（ヒューマンネットワーク）ができる固い絆となった。そしてこの同窓会を基盤として、タイには泰日経済技術振興協会〔TPA:Technology Promotion Association(Thailand-Japan)〕や泰日工業大学（TNI:Thai-Nich Institute of Technology）、ベトナムにドンズー日本語学校などが生まれ、インドにも日本語学校やIT企業が生まれることになった。たぶん ABK での生活が大学の留学生だけだったらこのような深い発展はなかったのではないかと、思います。留学生だけでなく、技術研修生も日本人（学生・職員）も一緒に生活した—いわば一種の梁山泊であった、ということが、今から考えるととても大きな意味があったのではないかと、思います。

イスラム 私が、新星学寮（ABKの母体となった学生寮）に住んでいた頃には、毎日寮の掃除も、食事の準備も寮生が当番で交代でしてました。それまでほとんど料理を作ったこともないし、それにたくさん作るのも、最初はどのようによいか分かりません。私も、国に手紙を書いてカレーの作り方を聞いてつくったりしました。（今は上手ですよ！）また、週末には誰かの部屋に日本人学生も留学生もみんなが集まって、話したり、飲んだり、食べたり、色々と、やはり楽しかったですね。それでも、喧嘩もするし、お互いに困ったことをサポートしあったりしていたんですね。そうした助け合いは留学生だけじゃなくて日本人もいたから成立していたと思います。今でも、日本人学生もアパートが高くて田舎の親が大変な時代と聞いてます。だから、ABKがその経験を生かしてどこからか支援



小木曾友（財）アジア学生文化協会理事長

を得て、あまり大きすぎない、留学生と日本人学生と一緒に住める寮をもっと作って、若い人たちがそういう生活ができればいいと思いますね。

ガルグ 今は、中国、韓国との経済戦争が起きている。ですから、そういう時代にそれぞれの若い人をどうやって結びつけるかが重要です。例えば、外では難しい問題がありますが、ABKには、今でも色々な国の人が来て暮らしています。中国人も韓国人もいっぱいいるじゃないですか。そういう交流は大変大事ですよ。

Home away from home

小木曾 もう一つ先生が凄かったのは、アジアの国には大国もあるし、小国もある。また経済的に豊かな国もあれば貧しい国もある。政治体制も資本主義の国もあれば社会主義の国もある。あのころは中国の留学生はまだいませんでしたが、キューバの研修生はいましたから。少なくとも ABK の中では、そういった民族や政治体制、宗教、風俗習慣の違いも



雅留宮久磨（がるぐひさまる）

インド出身 エーザイ（株）インド担当顧問、（株）
ニューリンクジャパン取締役会長
東京大学・早稲田大学留学

超えて、みんな平等だという考え。また、日本は戦争を起し、アジアの国を植民地支配したり侵略もした。そういう意味では日本は他のアジアの国と対等ではない。アジアの留学生・研修生に接する場合は、日本人の価値観を捨てて、まず相手から学びなさいと。そういう気持ちでアジアの人々と接して初めて仲良くなれる、と先生は仰ってました。「あらゆる個人、あらゆる民族の自主と平等」という理念を穂積先生はABKで実現しようとしたのではないのでしょうか。

そして、その理想はABKの中ではある程

度実現して、当時日本はまだアジアの留学生がアパートの部屋を借りるのも大変な時代だったけど、ABKの中では、Home away from home が実現していたと思います。ある時、フィリピンのアレグレさんという留学生から、「小木曾さん、穂積先生というのは不思議な人ですね。」と言われたことがありました。ABKには何十という国の人がいて、それで言葉もあまりわからない、風俗習慣も全部違うのに、まるで自分の国にいるように自由に伸び伸びとやっている。そういう場を作った穂積先生というのはどういう人だろう、不思議な人だ、というわけですね。

ガルグ “Home away from home” ですよ、みなさん。例えば私がABKにいた1971年の頃、インド、バングラデシュ^(*1)とパキスタンの人がここで一緒に住んでいるんですね。当時は第3次印パ戦争の時ですから考えられないですよ。しかし、お互いに喧嘩もしないし、いがみ合いも罵りあいも何もないわけです。ABKでピンポン大会などあればみんな一緒に応援しているわけですよ。パキスタン人も、バングラデシュを応援してるんです。その時私は、ABK自治会〔アジア学生文化会^(*2)〕の会長だったんですが、本当にすごいことだと思いました。ABKはそうした雰囲気でしたよ。

小木曾 その時、バングラデシュの学生もパキスタンの学生も、ここ（ABK）の別々の

(*1) 東西パキスタンの対立が激化し、1971年3月西パキスタンが東パキスタンに軍事介入し、内乱が勃発。そして、1971年12月、インドが軍事介入し、第3次印パ戦争がはじまりインドが勝利し、東パキスタンがパキスタンから分離独立してバングラデシュとなる。

(*2) 職員も学生文化会のメンバーで、ここで、会館の生活の問題やルール作りが話し合われた。また、文化活動、スポーツなどの諸活動が委員会で計画され職員と協力して行われた。

部屋でプラカードづくり、デモに出かけていく。ABKの中では決して喧嘩をしない、という申し合わせをして。外では、お互いに対立した主張をする。それは不思議な光景でした。また、同じ頃、ベトナム学生が反戦運動を起こした時も、学生が新星学寮やABKに集まってデモに出かけるんですが、その時、穂積先生はそのデモの後について行くんです。自分が預かった留学生だから責任がある、トラブルが起こらないように私はついて行くんだと言って、デモに付き添って行った。

バハドル ベトナム戦争の時代はベトナムの留学生も大変でしたね。特に田中宏先生が、ベトナム人留学生と当時の法務大臣のところに行き、在留資格のことでお願いをしたことがありましたね。1968年にベトナム戦争のソンミ事件があって、69年にそのソンミ事件が暴露されてから、日本でもベトナム人留学生、それに外国人留学生も抗議のデモをやったんですね。いろいろ大変なことがあった時代です。田中宏さん、亡くなられた田井さん、工藤さん、小木曾さんなど、穂積先生と一緒に色々な支援をしてくださいましたね。

三つの心得

小木曾 私は1960年、ABKの開館と同時に日本人学生として入ったでしょ。新星学寮を出てから、何となく穂積先生の回りにいたくてABKの近くのアパートに住んで、大学院に行っていたんですね。当時、アジア文化会館（ABK）がそろそろ出来る頃だということを知っていて、出来たら入りたいなあと思っていたんです。でも、どうしたら入れるのか、



橋本 イスラム ヌルール

バングラデシュ出身 スリジョン株式会社代表取締役
電気敷設コンサルタント

ABK 同窓会奨学金の研修生として来日、東洋大学で学ぶ。卒業後発展途上国での電気通信関連の事業に従事

よくわからない。ある日、穂積先生から電話がかかってきて、「友さん元気かね?」、「はい、元気です。」「あなたのアパート代は今いくらかね?」って聞くんですよ。その時いくらか忘れちゃったけど、「〇〇〇円です。」と言ったら、「ああ、そうかね。それじゃあアジア文化会館（ABK）の方が安いね」。それで僕はすぐピンと来て、「あ、わかりました。行きます。」と即座に答えて、その一週間後に荷物を全部リヤカーに積んでABKに来たんです。それが僕がABKに入ったきっかけです。当時は日本人は僕のほかに杉浦正健さんや関川弘司さん、勝山隼さん、久保哲也さんなど、4階と5階の4人部屋に住んでいました。会館での生活が始まるとき、穂積先生が日本人の学生や職員によく話した「三つの心得」



グル アハマッド バハドル アーセフィ
 アフガニスタン出身 通訳、翻訳家
 文部省国費留学生として来日、静岡大学、上智大学、創価大学で学ぶ、専攻は政治学

というものがありません。その第一は、「ゴミを拾え」。穂積先生はご自分も会館に来るとゴミを拾っていました。

ガルグ 覚えてますよ。よく拾ってましたね。

小木曾 それはどういう意味かという、何十という国の人がいて、民族性も言葉も宗教も風俗習慣も違う。だからどこか一つの国の法律とか道徳とか価値観で統一することなどできない。ゴミを拾う、つまり生活の場所をいつも清潔にするが大切だということは、国の違いを超えて誰にでも理解できることだ、というわけですね。穂積先生は、若い頃禅寺で修業して、新星学寮で寮生が自分達で掃除をしたり食事を作ったりするのも禅寺の方式を取り入れたものでしたから、ABKでもそれを実践されたわけですね。来日したばかりの留学生・研修生がタバコを吸ってポンと吸

い殻を捨てると、穂積先生がそれをだまって拾うんです。それを見て彼らはびっくりするわけですね。特に玄関のところに吸い殻がいっぱい溜まっていて、それを穂積先生が拾うんですが、ただ拾うんじゃなくて、みんな国を離れて寂しいんだろう、それでここでタバコを吸って家族のことなどを思い出した時に、つい捨ててしまうんだろうと。そう思いながら拾っているんだと僕に話したことがある。そういう先生の気持ちも伝わって、タバコのポイ捨てをする人もだんだん少なくなっていきました。

「心得」の二番目は「留学生・研修生に学べ」。実はこれがよくわからなかった。留学生は日本に学びにきた人たちだから、留学生に教えなさい、というならわかるけど、留学生に学べ、というのはどういう意味だ、と。そして、「心得」の三番目は、「アジアの人と接する時は、まず日本人の価値観を捨てよ」というのです。これが全くわからなかった。穂積先生の言われるには、日本人はアジアの国のことをよく知らない、中国や韓国は「一衣帯水」とか「同文同種」とか言っているが、日本人は実は良くわかっていない。特に侵略戦争や植民地支配の日本は加害者、アジアの人々は被害者ということを知っている日本人はよく自覚していない。ABKの中で留学生と日本人の間で意見の対立などがあった時に、それが違うとかいいとかいうことを日本人の価値観ですぐに決めつけたら、相手はそれで心を閉ざしてしまい、関係は終わりだよ。まず、こちらが心を開いて、相手の言うことをよく聞くこと。そしてだんだん理解が深まって、本当に仲良くなってからなら、今度は何を言ってもいい。

「留学生に学べ」というのはそういうことだ、
 というんですね。ここは日本だから、絶対日
 本人の方が優位な立場に立っている。だから
 優位にある方が謙虚になって心を開いて、そ
 れで初めて留学生・研修生の人たちが心を開
 く。ここは自分たちの気持ちをよくわかって
 くれる所だとなって、だんだん心を開いて仲
 良くなることができるから、という意味だっ
 たんですね。当時の僕たちはそこまで理解で
 きずに、わからないままにやっていたわけだ
 すが、この「三つの心得」に従って生活して
 いると、本当に仲良くなることができました。「あ
 なるほど、これはそういうことだったんだ
 な。」と実感したわけです。

実は、こういうことを実現するためには、
 ABKは民間の力で建設し運営する必要がある、
 という固い信念が穂積先生にはあって、
 留学生の会館を運営するには、多額の経費が
 いるだろうからと、当時の岸首相（穂積先生
 の大学の先輩。上杉慎吉博士の同門）の計い
 で、政府（文部省）から補助金が出るように
 するというようなお話もあったようですが、
 先生は民間の自由なやり方で運営したい、と
 という意思を貫かれ、政府からの補助金は辞退
 したと聞いています。

ガルグ 私は岸さんに会っているんですよ。

小木曾 ABKのニューイヤーパーティー（新
 年会）に来て歌を歌われたことがありまし
 た。岸さんの女婿の安倍晋太郎さん（現安倍
 晋三首相の父上）が、まだ毎日新聞の記者の
 ころからアジア学生文化協会の理事になっ
 ていただいた、というような親密な関係でし
 た。安倍首相が以前、タイのTNI（泰日工
 業大学）を訪問され、「泰日工業大学」とい



ホラス ノリブン インドネシア出身
 東京水産大学大学院修了（現東京海洋大学）
 現在インドネシアで南洋真珠養殖及びインドネ
 シア鉄道車両事業に従事

う校名表札の字を揮毫されたのも、そうした
 ご縁に遡るわけですね。

自国の社会発展に貢献してください

編集部 ガルグさんはどんな経緯でABKと
 関係を持ちましたか。

ガルグ 私は学振（学術振興会）の研究者
 として1970年に初めて来日したんですが、
 ABKに入ったのは、東大で私のPhd.の指導
 教授だった小林先生からの紹介です。当時は
 ラオさん（インド人留学生、当時ABK在館生）
 が小林先生を知ってたので、それでABKを
 紹介されたんですよ。

インド人の場合、まず日本には来ないじゃ
 ないですか。食べ物の問題もあり、言葉の問
 題もありますから。私の働いていたインドの



大学（ベナレスヒンドゥ大学）に日本に留学経験のある先生が一人いたんです。彼は6か月の奨学金をもらって来日し、3か月で帰国してしまったそうです。当時、私はカナダと日本から奨学金をもらえることになっていたの、どちらに行くべきか、いろいろ調べたんですね。そこでその先生に話を聞いたら、日本には行かないほうが良いと言われました（笑）。食べ物の問題、言葉の問題、文化の問題、・・・、問題が多いと。それで、私は3か月で戻ってきたと。じゃどうしようかと思っていた時に、東大の先生からこういう研究をやりましょうという手紙が届いて、それで決心して日本に来たわけです。当時はインドから海外に出る時には100ドルしか持ち出せなかったんです。日本にはエア・インディア（インド航空）で来たんですが、搭乗予定の飛行機がキャンセルになってしまい、それが金曜日で、結局土曜日の深夜12時ごろ羽田に着きました。当然迎えは誰もいな

い。土・日は日本に着いても大学に電話がつかないし、東大の先生には連絡がとれなかったんですね。持っているのは手紙だけです。宿泊先はアジア文化会館と書いてある先生からの手紙だけでした。仕方がないので、リムジンに乗って、シティに行きたいと思ったけど、当時はまだ英語を喋る人がほとんどいない。とりあえず、シティのホテルへ行ってみようと、銀座のどこかのホテルまで行ったんです。そうしたら酔っ払いが一人ホテルから出てきた。冬の夜中の2時ですよ。彼は「キャンアイヘルプユー」と英語で言ってくれたんですよ。それで手紙を見せたら「アイノー、ディスプレイス」といって、一緒にタクシーに乗せてくれ、赤坂の“アジア会館”に行ったわけです。本人は私をアジア会館で降ろして帰っちゃったわけですよ。本当にとても親切な人でした。到着した場所は違いましたが、そこに空室があったので、その晩はアジア会館で寝たわけです。そして次の日、アジア文化会館（ABK）のラオさんに電話をしてやっとABKにたどりついたわけです。そして、ラオさんの紹介で穂積先生と田井さんと小木曾さんにお会いして館内をいろいろ案内してもらいました。

来日後思ったのは、インドで聞いた日本人の印象と違って、日本人はすごく優しいかたということです。酔っ払った人が夜中にタクシーでホテルまで送ってくれた。今でもその方に会いたいと思うんですよ。そしてABKに来たらいろんな国の人がいるじゃないですか。雰囲気が外の世界と全然違う。聞いていたことと全然違うわけです。そしてABKが私の日本の家になったんです。しかし、ABK

の外に出るとまったく違うわけですが、それが1970年のことです。

穂積先生とはあまりたくさん話しはしなかったのですが、帰国する時、「雅留宮」と彫られた象牙の太い印鑑をもらったんです。その当時は学生で、日本では印鑑をサインとして使うということを知らなかった。だからインドに帰って家に飾っておいたわけです。その後、ABKでアルバイトをしていた岡田さんと深谷さんという外大（東京外国語大学）の学生2人が、1年間インドに留学することになりました。その時、私が大学やビザの手続きをしたのですが、彼らがインドに留学した後、私の家に来てその印鑑を見て、それが飾り物でないことや、漢字の意味を教えてくださいました。それで改めて、穂積先生は私とはたまに話すだけだったのに、私のことをよく見ていてくださったのだと思ったんです。

その後日本人と結婚してインドの大学で働いていましたが、穂積先生、田井さんから手紙をもらい再び日本に戻って来ました。今度は小木曾さんの紹介で、ABK同窓会の研修生としてエーザイに入りました。その後、エーザイの社員になって、退職まで働きました。エーザイは製薬会社ですから、やはりヒューマンヘルスケアをおこなう仕事でもあるんですね。その仕事で65か国に行ったわけですが、

その時かつてABKに住んでいた人たちにもよく会いました。会った時のフィーリングですね、どこでもABKの印象が同じなんです。フィロソフィーですよ。どこでもみなさんABKを忘れてないですね。ブラジルでもメキシコでも、……。本当に不思議なフィーリングですよ。

小木曾 いろんな国でABKの同窓生に会ったわけですね。

ガルグ ええ。やはりフィーリングなんですね。どこの国のお医者さんであってもABKでの生活は忘れてない。同じフィーリングなんです。だからそのフィーリングが何んなのか考えると、『人間はみな平等だ』ということです。それが一番大事ですよ。それはABKに住んで身体に入ったものなんですね。^(*3)

それから、穂積先生は自立した人になりなさいと。私はエーザイで「インドに会社を作りましょう」と、10年くらい言い続けてきたんです。でもまだ早いということで在職中は実現しませんでした。定年後引き続きエーザイでインド担当顧問として長年の夢であったインドに100%エーザイの会社を立ち上げる事が出来ました。先生のフィロソフィーに『自国の社会の発展に貢献してください』と言うことが、心の片隅にあって、そうしたい

(*3) 1964年に同窓生の発意によりつくられたアジア文化会館同窓会の設立趣意書には「このたび、私たちアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の青年学徒は、アジア文化会館における数年間の共同生活を通じて、すべての個人すべての民族の自主と平等の原則を実証しながら、相互の連帯の意識をつよめ、ここに、内よりの自発的意欲を持って、アジア文化会館同窓会を結成することになりました。従って、私たちの同窓会は、自己の充実を通じて民族の発展に寄与するとともにひろく、アジア、アフリカ・ラテンアメリカなどにおける新興諸国の向上に裨益せんとするものであり、そのことは、同時に、全世界の平和に通ずるという信念と輝かしい理想にあふれ、それを成就しようとする青年の活力と創造性に満ちたものと言えましょう。……」とうたわれている。

と。そのことが定年退職してから実現したわけです。今8年になりますが、すでにインドで500人の社員を抱えて仕事をしています。社員500人にそれぞれ5人の家族がいるとすると、2500人ほどの人の面倒を見ているわけですね。その後工場も建設されました。自分の人生の中で、インドに貢献することが実現できた。先生のフィロソフィーの影響を受け、今それが実現でき本当に嬉しく思っています。その後、私は自分の新しい会社も設立しました。社名は「ニューリンクジャパン」といいます。「ニューリンク」とはどのような意味ですか、とよく聞かれるんですが、これは、マイオールドフレンズとニューフレンズ、その二つをリンクして仕事をやる、そういう意味なんです。何をやるか。今、薬に関連したいろいろな仕事をしています。薬は世界中のどんな患者さんに対しても同じです。インド人にはインドの薬、イタリア人にはイタリアの薬ではないですから。そうした薬を日本の多くの患者さんにも、できるだけ安く、ハイクオリティーなものを提供したい。仕事も何か社会に役立つことをしなければならぬという思いでやっています。穂積先生に影響されたんですね。どこまで正しいかわからないけど、私は日本に来て人生が変わっちゃったんですよ。名前まで変わって、奥さんもABKで働いていた日本人だし(笑)。だから日本に来て良かったですよ。あの日本行きを反対した先生は、もう亡くなりましたが、一度報告しました。日本に行っても良かったと。やっぱりABKに住むことができ日本の生活、印象が全然違ったんだろうね。ABKの生活は全身に影響するんですよ。

小木曾 今、ガルグさんの話を聞くと、ガルグさんは、穂積先生が信頼して判子までつくってもらったり、自分だけが特別のことをしてもらったと思っているでしょ。ところが留学生・研修生はみんなそう思っているんです。エジプトのメルザバニーさんという人が文章に書いているんだけど(『アジア文化会館と穂積五一』)、穂積先生と会った人は全員自分が特別待遇を受けたと思っているんだと。しかも面白いのは、留学生だけじゃなくて日本人もそうなんです。例えば私も、穂積先生は俺を一番かわいがってくれたと思っているわけで、なるほど確かにそうなんだと(笑)。

あなたは何か困ったことないの？

編集部 イスラムさんは、ABK、新星学寮とはどんな出会いですか。

イスラム 私は1970年に、ABK同窓会の研修生で来日したんです。当時、東パキスタン(その後、バングラデシュ)の製紙会社の電気部門で働いていたんですが、そこを辞めてパキスタンのダッカ同窓会の推薦で日本に研修で来日したんです。同窓会の奨学金に受かったという情報はダッカには来てたんですが、私が住んでいたのはチッタゴンというところで、郵便事情も悪かったのでその知らせを受け取ってなかったんですね。知ったのは、たまたまダッカに遊びに来て同窓会事務所に立ち寄った時で、あなたを探してましたよ。あと3日間遅かったらキャンセルになっていたそうです。本当に運命ですよ。さっきガルグさんが話したようにめぐり逢わせと運命

は、私の場合きっとそこだったんですね。それで1970年9月に来日したわけです。その時空港に迎えに来てたのは小木曾さんでした。

最初は中部電力で研修しました。そこで3か月の研修が終わったら帰国するはずだったのですが、ちょうどその頃東パキスタンと西パキスタンの対立が激化してきて危ない状態になり帰れない。小木曾さんに相談したら、新しい研修先を探してくれて、その後、三菱重工で3か月間、それから新潟鉄鋼で3か月間研修を受けたんです。それでまた帰国ということになるわけですが、1971年12月に東パキスタンが独立してバングラデシュになって政府も変わってしまい、会社もたぶらないわけです。どうすればいいのかまた小木曾さんに相談して、自分は学校に行きたいんだと言った訳です。あの時私は専門学校を出て1年くらい働いてから来日しましたから大学にはすぐに入れない。そこで東京農工大の聴講生になって1年間過ごしました。ただ自分は聴講生の意味をよく理解してなかったので1年間いて聴講生をやめて日本語学校に行き、もう一度一から出直したんです。それできちんと日本の大学に入るための準備をしたわけですが、お金はアルバイトで稼ぐしかない。研修生の生活が終わった時に小木曾さんが私に、あなたはABKには住めないから、新星学寮に行かないかと言われたわけです。

小木曾 もう研修生が終わっているから収入がないでしょ。でもABKだと部屋代を払わないといけない。その時新星学寮が頭に浮かんだけど、あそこは冬は寒い。木造の古い家屋で、電気ヒーターしか使えない。それでイスラムさんに聞いたのね。こういうところが



あるけど、あなたは本当に日本に残るつもりなら、ここしかないけど行きますかって。したら、彼はしばらく考て、「私はやります。」と答えた。その時の目がすごかった。で、新星学寮に入ったんですね。

イスラム 大学は東京農工大の受験に落ちて、私立の工学部で一番安かった東洋大学に決めたんです。小木曾さんに願書を取寄せてもらいましたね。実は、国立大学も地方なら行くチャンスはあったのですが、東京ほどアルバイトで稼げないので、いろいろ考えて東洋大学に入ることにしたんです。そこで、入学金を払うことになって、帰国用に持っていた飛行機のチケットを現金にしたのですが、それでも10万円足りなかった。それで毎日悩んでいたんです。ところがある朝、アルバイトに出掛けようと歯を磨いていたら穂積先生に後ろからポンと肩をたたかれて、「あなたは何か困ったことないの？」と聞かれたんです。そしてちょっと一緒に朝飯を食おうと言うんです。それで奥の先生のところで朝飯を食べながら、入学金のことを話したら、「わかった。いくら足りないんだ。」と。私が10万円と言うと、「じゃあ私が貸してあげるから、アルバイト

をしながら毎月どこかに口座を作ってそこに返しなさい。」と言ってくれたんです。それで無事入学することができました。

大学に入って最初の夏休みに、たまたま東京でインドやバングラデシュの高校生を招待したセミナーが開かれたんです。その時に私に小木曾さんか誰かから、ベンガル語、英語、日本語、ヒンディー語、4つの通訳をやれないかと言われてやったらすごくお金をもらったんです。10万円以上もらったので、それを穂積先生のところへ持って行ったら、「あなた、約束が違うよ。」って怒られました。仕方がないから、その10万円は口座に入れておいて、アルバイトをしながら大学生活を続けたんです。そして、卒業したとき、穂積先生のところに挨拶に行きましたが、先生は口座の10万円を受け取らず、「これはいいよ。あなたへのプレゼントだよ。」って。あの当時の10万円は凄い金額だったんです。

小木曾 穂積先生はもともとあげるつもりなんだけど、あげるって言っちゃうと、心が弱くなるでしょ。だから返しなさいと言って、それで心を強くさせた。イスラムさんは英語塾のアルバイトなどしてて、だいたい夜の12時ごろとかに寮に帰ってくるわけね。で、たまたまあなたが帰って来て寮の玄関のドアを開けた時に、穂積先生と僕がそこにいたんです。先生が、「遅くまで大変だね。あんたの身体からは後光がさしている。」と言われたのを覚えています。僕は先生がイスラムさんにお金を貸したことは知らなかったんだけど、先生は、イスラムさんが必死でやってるのをずっと見守っていたんですね。

イスラム だから私もガルグさんが言ったように、ABKと新星学寮で人生全部変わっちゃった。

小木曾 穂積先生はただお金を貸すということとはしない。やはり自分で自立してやらないとダメだと言うことを考えているわけですね。

イスラム それとその時思ったのは、あの当時の10万円って大金でしょ。よく知らない私に貸してくれるって、これはどういうことって、びっくりした。それがまず一点。その前にもガルグさんと同じように日本人の親切さを感じたこともありました。私は中部電力で研修を受けていた時、中部研修センター〔財団法人海外技術者研修協会（AOTS：初代理事長は穂積五一）の研修センターで所在地は名古屋〕にいたんですが、研修は終了したものの帰国できず、滞在期間を延長して新たに探してもらった研修先である神戸の三菱重工に行くことになったんです。だけど、神戸へ行くのに3万円くらいお金が足りなくなってしまう、当時中部研修センターの高木さんにお金を借りたんです。私はお金をもらったらすぐに返しますと言って貸してもらい、そして約束通りにすぐ郵便で返したんですが、そうしたら高木さんからすぐに電話があって、「珍しい人だな、あなたのような人には初めて会ったよ」と言われました。誰もがそう思って当然の時代なのに、彼は快くお金を貸してくれたんですね。

会館をつくった貢献の大きさ

編集部 バハドルさんはいつごろ ABK に入りましたか。

バハドル 私は1968年だったかな。ここに入って、初めに小木曾さんと誰だったかな、面接しました。私は1967年に文部省の奨学金で来日して、はじめは駒場に住んでました。文部省の奨学生は1年は駒場に住まないといけなかったんですが、自分の希望としてはどこか外に下宿して、日本人といろいろ交流して早く日本語ができるようになりたいと思っていました。だから、下宿先を探して下宿をしたんですが、来日後まだ1年にならないので、文部省から下宿のお金が出してもらえない。しばらく下宿していましたが、お金が少し大変だったので、また駒場に戻るか他を探すかしなければなりません。そこで、当時私は外語大（北区西が原）で日本語を勉強していましたが、誰かの紹介で外語大の近くにアジア文化会館（ABK）という留学生の宿舎があると聞き、ABKを希望して面接を受けたわけです。

そして、ABKに入ってからしばらくして静岡大学に編入試験を受けに行くことになりました。その時ABKのみなさんには本当に親切にしてもらいました。静岡に行く時誰かに紹介してもらいましたね。藤本さんとあとは誰だったかな。静岡大学の先生も紹介してもらいました。そして、無事静岡大学に入り、そして卒業して、また東京に戻り上智大学の国際学部の研究生になりましたが、その時またABKに入りました。そして、その後は創価大学の大学院に入り、ABKには長い間住みました。私は、穂積先生とは、あまり話したことはないですが、アジア、アフリカ、ラテンアメリカからの留学生、研修生、研究者などがこうした恵まれた、住み心地のよい



環境に暮せたことは大変重要です。先生は後年理事長室のソファーでよくお休みになっていましたが、こういう会館をつくった貢献は大きいですね。また、穂積先生を支え、そこで働いていた職員の方々、田井さん、小木曾さん、田中宏さん、工藤さん、永田さん、柳瀬さん、阿部さんはじめ食堂の方々も皆さん非常に親切でしたね。

それから留学中の1978年にアフガニスタンに政変⁽⁴⁾があって、その時はクーデターでしたが左派政権ができて、私は左派政権を支持してここで記者会見もやりました。また、アフガニスタンでは1965年ころに大学の教師、学生を中心とした新しい民主化運動の動きが始まり、私も来日前に学生運動に加わっていました。世界的にもそうした潮流がありました。日本でも学生運動が盛んな時期でした。東大、早稲田、…。私が来日して外



人間的和合

編集部 ホラスさんは国際学友会の旧学生寮の最後の人でその後 ABK に移ってきたでしょ。その頃の話からしていただけますか。

ホラス 私が日本に来るのは父の真珠の仕事の関係なんです。日本はミキモトという真珠の有名なブランドがあって、真珠の養殖であれば日本は先駆者、草分け的存在です。海外留学というとインドネシアではヨーロッパに行く人が多かったんですが、あえて日本を選んだのはこのためです。もう一つは同じ東洋人で差別がないという話も聞いてましたので。そして、1975年に来日して国際学友会日本語学校に入りました。学友会は昔から外務省の管轄（昭和10年外務省の外郭団体として創立）で、関係省庁の役人の天下り先になっていると聞きました。従って、政府からたくさん予算をもらっているのに、私が、学友会日本語学校に在籍していた時、累積赤字がたまり土地を売却しなければならないという事態になって、私たち留学生は住んでいる寮から突然出されることになりました。学友会の土地は新宿区の真ん中、大久保に広大な土地を持っていました。民間で、そんな場所を確保するのは非常に難しいですね。日本は先進国であり、先端技術もいろいろ持っているにも関わらず、留学生の受け入れ態勢は非常に遅れているように思いました。私が、学友会にいた時は、日本が高度経済成長期にあ

語大で日本語を勉強していたときに、外語大もしばらく閉鎖されました。それで、私たち留学生はオリンピアアネックス（国立オリンピック記念青少年総合センター）という代々木だったかな、そこに移動して勉強しました。私たちは来日後、はじめは駒場東大前に住んでましたが、駒場キャンパスも学生運動で大変でした。その後は、年を追って学生運動も沈静化し社会も安定しましたね。この間私は、大学に編入し、研究生となり、そして大学院に入り、大学院を修了しました。しかし、その後もだいぶ長い間日本にいたことになりましたが、それは学問のこともあるけど、やはり左派運動にかかわり、帰国すると身の危険とか間接的にはあったからです。大学院を出た後、ダリ語の本を出版したり、外語大にペルシャ語学科が開設された時、講師を務めたこともあります。

（*4）アフガニスタンの略史

1919年独立 1926年アフガニスタン王国に 1973年アフガニスタン共和国成立 1978年アフガニスタン人民共和国成立 1979年ソ連のアフガン侵攻 1989年ソ連アフガンから撤退 ～2001年内線とタリバン政権 2001年～タリバン崩壊と新政権

りながら、学友会は拡張でなく縮小するというのはちょっと理に敵わないことでした。つまり学友会は土地を売却して私たちの寮もなくなってしまふ。我々にとってこれは大変困ることです。私たちは当面对応すればよいかもしれませんが、これから日本に来る後輩達は寮がなければ困るということで居座りました。その時寮長をしていたのはベトナム人ですが、当時の南ベトナム政府との政治的な理由で表立つことができない

ため、そこで私とマレーシアの留學生が世話人という立場で表に出ました。

対外務省、日本政府が相手になりましたので、私たちは大使館に呼ばれて大変でした。その時に田中宏先生（愛知県立大学）が手を差し伸べてくれ、学友会の寮に来てくれました。そこで初めて田中宏先生と会って相談しました。その後、寮を出るか出ないかという段階まで話が進んだ時には、田中先生と荻田先生（東京YWCA）、鈴木弁護士の3人が寮に来て、学友会理事長、専務理事を交え話をしましたが結論が出ず、更に外務省の次官まで来て話し合いをしましたが、解決方法はないので出て行かなければならないということになりました。そこで、最後の最後に田中先生は、外務省の次官に対してこのようなことを言っていました。「私たちは鉄砲を持って彼らの国を侵略したんだよ！このくらいのがやれなくてなんなんだ。」と、田中さんはすごく怒って言いました。我々は鉄砲を持ってこの人たちの国に行って侵略したんだと。それで私は大変田中先生に強く心引かれまし



穂積先生とホラスさん（右）

た。結局、そのあと我々は強制的に寮を出され、その後、田中先生と荻田先生のおかげでABKに入ることになりました。

小木曾 最後は強制的に出されたわけですね。

ホラス 私は最後まで居座りしてましたが、最後は電気も消されて。しばらくはアパート生活をして、その後ABKに入りました。最初会館で、私は面接という形ではありませんが、職員の前口多美子さんに伴われて理事長室に入り初めて穂積先生とお会いしました。私は先生の晩年しか知らないのですが、会った時はすごくシンプルだったんですよ。先生は何も言わずに、ただ「ホラスさん、この人は前口多美子さんですね。しかし今は田中多美子さんです。」と。それだけでした。

先生はシンプルなんですよ。それが先生の最初の印象でした。

私はABKに入ってその後肌で感じたことは、まさに留學生、日本人學生、研修生、そしてJICAとか大学の先生といった研究者が、ここには一同に集まって共に生活していま



す。こんなコミュニティーはどこにもないです。日本中探してもない。私にとってABK滞在期間は人生の中でも大変貴重な時間でした。しみじみそう感じています。

田中先生の「鉄砲持って…」は大変インパクトがありましたが、穂積先生がよく使っていた一つの言葉、「人間的和合」という言葉、私はこの言葉がすごく好きなんです。奥が深い言葉です。まさにその和合があれば世界中は平和です。先生はこの「人間的和合」という言葉をみんなが理解すればおそらく戦争がなくなるでしょと。私はただこの言葉を聴くだけでなく、直感的に先生から感じられる言葉でした。

それから、会館で先生と顔付き合う中で思っていたのは、先生の発想、私たちとのスタンスは何なのか、というものが一つあります。日本では、未だに年配の人たちも、ごくごく普通の人たちも、また若者も、未だにです、第二次大戦（大東亜戦争）は、日本があなたたちの国を植民地支配から開放してあげたんですよと、そしてそのおかげであなたたちの国は独立できたんですよと、言ってるわけです。現に私は水産大学（現東京海洋大

学）1年生の時に、私とシンガポールの留学生と日本人の学生が、大学の図書館でたまたま話をした時、日本人の学生が自慢気にシンガポールのときの山下將軍の作戦はすごかったねと。ほんとに開いた口がふさがらないというか、シンガポールの学生の顔色が変わってきたんです。まあこれは彼を攻めたてることではないんですが。一方、穂積先生の言う和合という言葉と我々留学生とのスタンス、また先生の言うアジアの人から学ぶというのはどういうことかといいますと、まさに先ほどの話とは正反対の立場で我々と付き合ってることです。しかし先生は、もちろんそういうことを一切意識していないのです。先生は日本は皆さんの国に侵略し、迷惑をかけましたと。私は、田中先生が言った言葉に心引かれてABKに入って、穂積先生と出会って、ますます凄いところだなあと思ったのはこここのところ。それを言えるのは穂積先生だけです。ところが他の人、外部の人たちはそうじゃないんですね。それは彼らのせいではなく、教育のせい。私たちも学生の時に、ABKで花金会とかラーメン会というのを時々開いてました。職員、留学生、日本人学生、そして研修生、研究者など、その時集まれる人が声掛け合って集り様々な話をしたり、また、勉強会や討論会もしていました。一度、それぞれの国の歴史の教科書を持ちよって勉強会をやりましょう、という話題が持ち上がりました。しかし、それは実現しませんでした。それで良かったと思っています。なぜかという、それぞれの歴史に共通点がありません。論議すれば平行線の結果になるでしょう。それはしかたないことだと

思います。つまり、日本の歴史で教えているものと他の国のそれとは違うんです。インドネシアの歴史はほとんどオランダの悪口がたくさん書かれていて、そして3年半の日本の悪口が書かれてる。日本の歴史教科書では一切それに触れられてませんね。韓国も韓国の歴史的なことは違うわけですよ。これを議論しても傷をなめ合うだけで何もよくなりません。

歴史的怨念だけを掘り起こすだけでよくなりません。だからしなくて良かったなあと思います。でも我々は、未だに日本人が我々に対して、あなたたちの国はこの大東亜戦争のおかげで植民地支配から独立したと言ったら、大変憤りを感じますよ。

小木曾さんは覚えていると思います、九十九里浜でABKの学生、職員の合宿をしたときに、外部からの参加者がこれを言ったんですね。（「大東亜戦争のおかげでみなさんは植民地支配から解放されたでしょう」と。）その言葉を聞いてみんなシーンとなってしまった。私は立ちあがって怒鳴ろうと思ったけど、（穂積先生はすでに亡くなってましたが、）先生のことを考えてその気持ちを抑えたんです。私はインドネシアのブキット族ですから血が粗っぽいので（笑）。でも、当時はそう思って当然。今は私もだいたい頭がやわらかくなって、仕方がないと、これは教育のせいだと思うようになりました。しかし私たちに向かってこれだけは言うて欲しくないと思います。こうした我々の気持ちをよくわかっているのは穂積先生だけです。ですから、そこで私は先生の言う人間的和合、そして先



生の我々に対する理解とスタンスが、先生が他の人と違うところだと考えるところです。

小木曾 そういう理解があって初めて「和合」が成り立つんですね。そうじゃなければ和合も成り立たないですね。

ホラス 今、調査によるとインドネシアはアジアで一番親日国家と言われているわけです。親日国家というのは、ミャンマー、インドネシア、ベトナムですね。これが否定できない側面が確かにあります。例えば、今みなさんがジャカルタ行って、独立戦争英雄墓地（カリバタ英雄墓地）に行くと、インドネシア独立戦争（1945-1949）に参加して亡くなった数百人の元日本軍の残留兵がそこに眠っています。なぜかという、彼らは戦争でインドネシアへ行った時、これは違うじゃないか、我々は迷惑をかけているんじゃないかと。それで、日本が敗戦した後インドネシアに対する償いとして、自分の命を捧げ、鉄砲を持って、オランダと戦って血を流した。だからインドネシアの独立戦争に日本が貢献したことは否定できません。しかし、それはあくまでも彼ら残留兵自身の志願です。これに日本政府は一切関与してません。ですか

ら、独立戦争で生き残った日本人残留兵は、退役軍人としてインドネシア国家から英雄として勲章をもらい、未だにインドネシアに暮らしています。ですから、インドネシアの独立戦争には日本人残留兵があくまでも一個人として志願して参加し、独立に貢献したと言えるわけです。

それから、インドネシアには当時隣組とか、いろんな日本語が残ってるんですね。現在のインドネシア国軍はアメリカの軍の教育がベースになっていますが、それ以前の原形は日本軍なんです。オランダと戦うために残留した日本兵たちがインドネシア軍に参加して、作戦などを教え、自らの命を捧げて勝ちとった独立でもあります。少数でも全体に与えた影響は大変大きかったと思います。自分の母国でもない国で、鉄砲を持ってその国のために戦うことができますか。本当に立派だと思います。

翻って先ほどの話に戻りますと、日本の一

般の人はその歴史教育のせいで、多くの人が未だにあなたたちの国は大東亜戦争の日本軍のおかげで植民地支配から開放されましたねと言ってます。それは間違った認識だということをしり上げたい。

私が会館に来て先生とお会いした時に、「あ、違うな」と思いました。どこが違うかというのは、今、一生懸命私が話しているこの気持ちを先生は理解している、やっぱりこの人は違うなと思いました。先生が私たちと付き合ってる時の私たちを見る目が違う。私たちを受入れるスタンスが違う。こういう人はまさにこの人だけだろうと、はなはだ感じています。

小木曾 中に持っているものが違う。

ホラス 穂積先生の代わりになる人はなかなかいないけど、先生の周りからそういう人が出てほしいと思っています。

編集部 今日はいろいろ貴重なお話をありがとうございました。

アジアの友 500 号記念寄稿

穂積先生とアジア文化会館の思い出

石川 毅

私は研修生として1978年6月から1980年11月までABKにお世話になりました。穂積先生と直接話したことはありませんが、すごく印象に残っていることが三つあります。

その1

ある日、いつものようにABKの事務所で昼間、職員と韓国の留学生と私が話してましたが、その留学生が私に「大人の女性同士の話をするから、年下のあなたはあっちにいけ」と言いながら私の足を数回蹴る素振りをしました。そのとき、誰も気付かなかったんですが、

穂積先生が1メートルくらい後ろで話を聞きながら様子を見ていて、一言おっしゃいました。「〇〇さん、はしたないですよ」。その留学生は恥ずかしいような、困ったような、どうしていいか分からない顔をしていました。それを見た職員は手を叩き、ロビーまで聞こえるような大声で笑い出しました。穂積先生でなく、田井さんや、小木曾さん、工藤さんだったらどうなったかな。



在館当時。職員、留学生と。後列右から二人目が筆者、左端がホラスさん

その2

研修が終わり、ブラジルへ帰国の日。親しくなった在館生（留学生、研修生）や職員がABKの玄関に集まっていました。車に乗る前に振り返ると、階段の上の端に先生と田井さんが並んでずっと見送っていたんです。感動でした。

その3

帰国後、ブラジルの日系企業に就職しましたが、先生がお亡くなりになり、しばらくしてABKの仕事を手伝ってほしいとの連絡がありました。ABKの雰囲気が好きだった私はすぐにも来日したかったが、会社を退職するのに約半年かかり、1982年4月に再来日しました。すぐに先生のお墓と御自宅に伺いました。初対面でしたが奥様が「あなたなのね、先生がよく話してましたよ、ブラジルから来た沖縄出身の変な、おもしろい研修生がABKにいる、と」と話してくれました。嬉しかったです。

再来日後、色々な方から先生の人柄や穂積精神の話を聞きました。しかし、私は穂積精神とは教えられるのではなく、自分で探し、感じ、そして見つけるものだと思う。例えば、ホラスと私は在館生のときからお互いに相手呼び捨てです。ホラス⇔イシカワ、ノリブン⇔ツヨシ、俺⇔お前です。信頼しあい、ABK一家の兄弟だからできることで喜びや悲しみ、悩み、すべて共有しています。そういえば在館生時代からホラスと私を「お兄ちゃん」と呼ぶタイ人の「妹分」の留学生がいました。ABK 3色（3か国）団子3きょうだいです。国籍、宗教、民族を超えて人と人が結びつく、それが私の穂積精神です。寮、AOTS、ABKの職員、在館生、それぞれの穂積精神があると思います。



◀初めてのホームステイではゆかたを着せてもらい、花火大会に行きました。ご家族の優しさが本心に嬉しかった！



▲バイト先の上司が「ぜひ行きなさい」って、成婚式に参加しました。着物を貸してくれただけでなく、着付けも髪セットもしてくれて、幸せな初体験でした！

私が経験した大学生活は明治大学だけです。その感想ということになりますが、日本の大学はちょっと自由過ぎるかなと思います。大学だから好きにやれば良いという雰囲気が強すぎて、授業中寝ている人も多し。たしかにそれも自由の一つだと思うのですが、私はやめて欲しいですね。回りが緩い雰囲気だと、こちらの集中力も殺がれますし、先生の方も、誰も聞

いていないのならば身が入らなくなり、授業の質が落ちてしまうのではないかと心配です。

ですから先生は学生にある程度のプレッシャーを与えて、授業に緊張感を持たせてほしい。たまに厳しい先生の授業を受けてみると、本当にそう思います。

例えば欠席や居眠りにマイナスポイントを課すといったルールを作り、課題も毎週出して次の授業で報告させる。そんな授業だと、私たちのモチベーションも上がります。もちろん自分自身のやる気が一番重要なのですが、先生にも学生をやる気にさせるための工夫をしてもらえたらと思います。

また、授業の数が充実していて、たくさん魅力的な授業の中から自分が学びたいものを選ぶのは日本の大学の素晴らしいところだと思います。4年生になると就職活動のことを考えてほとんど授業をとることが出来ません。私の場合は予想より早く、4月に就職が決まりました。1年間、時間が空いてしまいました。

日本の場合は3年生の秋頃から4年生の秋頃まで、ほぼ1年をかけて就職活動をしますが、私はその期間をもっとコンパクトにできないかなと思います。今は情報収集からはじめて選考結果が届くまでの会社とのやり取りにとても時間がかかっています。それをもうちょっとスム

ースに短時間でできるシステムを大学と企業で作れないかと思うんです。

例えば4年生最後の半年を就職活動期間ということに決めておいて、それまではしっかりと授業をとれるようにしてくれたら、もっとたくさんのお金を学べますし、就職活動も集中して積極的にやるのではないのでしょうか。

私の実感では、大学で本当に勉強したのは3年間だけです。最後の1年は社会人になる前の、貴重な遊ぶ時間。と考えられる人はいいのですが、高いお金を払って入った大学で、それではもったいないなあと思います。

日本では日本人の信じられないほどの優しさにも触れながら、ここまで学んできました。これから社会人という厳しい環境での新たな日本留学が始まります。難しいことがたくさん待っていると思います。が、これまで支えてくれたみなさんのためにも、がんばって学んでいきたいと思っています。

▼同じ財団の奨学生達と(前列左から7人目)



日本の大学は3年で終わりますか？

ヤップ ジャーゴン (Ms. Yap Jia Ping) トレーナー

明治大学経営学部 4年生

私が留学先を日本に決めたのは、先に日本に留学し、就職していた兄の勧めがあったからです。

兄が日本を勧めた理由の一つは、環境がいいことでした。女性が一人、海外で生活するわけですから安全なところがいいと。その点、日本は治安が良く、人々も温かいので心配なしということでした。

二つ目の理由は経済面でした。親からの仕返りがあまり期待できない中で、経済的にやっつけているのか私は心配でしたが、日本は奨学金が充実しているので、がんばって勉強すればそれらを受給できる可能性はとて高いいと言われました。そして、勉強をしながらアルバイトができるということも大きなメリットだと。日本の他に私が留学先候補としてあげていたアメリカの場合、留学ビザで仕事をするとはできませんから。

最後に学習環境の面でも、日本は経済大国で、私自身日本企業の経営について学んでみたいと思っていましたから、行くのなら日本が最良だと考えたんです。

問題は日本語ですが、バトミントンの部活動

に全力を傾けたため私より成績が悪かった兄の「僕にできたからおまえにもできる」という一言がすごく説得力に満ちていて(笑)、不安に感じることは全くありませんでした。



日本に来て一番驚いたのは、日本人の時間に対する考え方でした。日本人は時間に対してすごく厳しい。マレーシアの場合、例えば結婚式の開始時間が7時だとしたら、全員が揃うのは8時、9時頃です。みんなそれをわかっているのに、全員が揃うまで、お喋りをしたりお茶を飲んだりして過ごし、皆が揃っ

てからやっと本番が始まるという感じでした。ですから、私もあまり時間厳守の意識を持ってなくて、先生との面談に遅れてひどく怒られた時も、「ごめんなさい」という気持ちより、「どうして?」という驚きの気持ちを強く持ちました。待ち合わせでも、日本人はみんな時間前に集まっていて、一人も遅刻をしない。それを見て、私も日本で暮らすには自分を直さないといけないと感じました。

心配していた経済面ですが、大学に入ってから1年目は学費は親に負担してもらい、家賃を含めた生活費は全てアルバイトをして賄いました。バイトだけではなく、勉強もがんばりましたから、2年生になる時には文部科学省の学習奨励費をもらうことができました。そうなるアルバイトも少し楽になりますから、勉強にさける時間も多くなり成績も伸びました。そのおかげで3年生からは民間財団の奨学金をいただけることになりました。

「がんばれば可能性は高い」。
本当に兄に言われた通りの結果になったんです。

早稲田大学中野国際コミュニティプラザに大口の支援決定 早稲田から始まる「国際青年交流センター」構想

早稲田大学（新宿区戸塚町、総長：鎌田薫）は、政治経済学部卒（1971年）の校友であり、ファーストリテイリング会長の柳井正様と香港の実業家である曹其鏞（ソウ・キヨウ）様より、また曹様の友人である香港の実業家・荻野正明様より、2014年度にオープンする国際学生寮「早稲田大学中野国際コミュニティプラザ」（中野区中野4）に、柳井様は個人として3億円のご寄付を、また、曹様や荻野様を始めとする、香港の実業家グループの皆様方より基金等を通じたご支援をいただくことになり、1月16日、小野梓記念講堂にて記者会見を開催し発表いたしました。今回のご寄付を契機に、早稲田大学は、柳井様、曹様、荻野様らが抱えている、世界各国の学生が相互の認識と理解を深めて持続的な友好関係を生む「国際青年交流センター」構想が、「早稲田大学中野国際コミュニティプラザ」を通して全国の大学に広がっていくよう、留学生と日本人学生との共同生活や様々な寮内教育プログラムを展開していきます。

●それぞれの理念が語られた記者会見の様子

曹様は自らが東京大学留学中、都内の学生寮「アジア文化会館」で日本人と生活した経験を踏まえ、中日両国が過去の歴史に捕われず、民間交流を継続的に促進することにより、両国相互の認識と理解を深め、相互信頼の下で持続的な友好関係が生まれると考えました。その長期的な観点から、中国と日本の学生が居住する国際

学生寮「中日青年交流センター」を設置することにより、両国の未来ある若者の交流を通じた持続的な友好関係を実現すべく、既に中国側の5大学に「中日青年交流センター」の設置を進めています。また、日本の大学にも同様のセンターを設置することでその輪を上げたいと考えています。また、友人である荻野様もこうした活動に賛同する香港の実業家グループの一員として、曹様とともにご支援いただくことになりました。

一方、柳井様は日本の企業にグローバルな視点が求められる中、母校・早稲田大学の国際コミュニティプラザにおける国際学生寮を通じて異文化理解と国際交流を推進しようとするプログラムと、早稲田大学が起点となり、日本における国際青年交流センター構想が始まってほしいとの考えと、20年来の交流がある曹様の活動にも共鳴し、今回個人としての支援を決めていただきました。

早稲田大学は、中長期計画「Waseda Vision 150」において、人間力・洞察力を備えたグローバルリーダーの育成を掲げ、新たな人材育成モデルを社会に発信するとともに社会貢献を果たしていくことを目指しています。「早稲田大学中野国際コミュニティプラザ」はこうした教育を強く推進していく施設であり、民間と大学が協働して国際交流を進め、民間が国際学生寮および国際寮内教育プログラムの推進を積極的に支援することの意義は大きいと考えています。

<柳井正様のお話>

20数年前に初めて香港でビジネスをしたのが曹さんの会社で、ビジネスには国境も業界の際もないことを学ばせてもらいました。東日本大震災に際しても、香港はじめ中国の取引先から日本国民に対して多額の義援金をいただき、なんらかのお返しがあった。また、早稲田大学はわが母校であり、こちらにもお返しがあった。曹さんと全く同じ意見で、昨今の日中の険悪な関係が継続することは非常に危険だと悶々と感じていたところ、鎌田総長から「早稲田大学中野国際コミュニティプラザの建設計画が具体的に進んでいる」ということをお聞きしました。この構想がすぐに実現できるとは思っていなかったのも、すごい縁とタイミングだと思いました。日中友好にも繋がるすばらしい国際青年交流センターをつくっていただきたいと思います。世界中からきた人々が寝起きを共にして、一緒に生活するということは、若い時には何にも増してすばらしい経験を積むことになると思うし、考えるだけでもワクワクします。大きくいえば日本と、香港含め中国への恩返しになると思います。服を作って売るといふビジネスには社会平和と繁栄が不可欠であります。日本と中国はもちろん、世界の平和と繁栄を心より祈念しております。

<曹其鏞様のお話>

3年前に私は日中友好のために、微力ながらなし得ることを行おうと決心しました。この数年、私は少なからず、時間を割いて、積極的に友人たちに語り、私の理念を説明し、賛同を得ることができました。日本においても、この行動が幸いにも、多くの方々に認められ、支持を得ることができました。昨年4月に、鎌田総長にお会いした際に、日本における国際青年交



流センター構想を早稲田大学中野国際コミュニティプラザで実現したら、という提案を受けました。日本における、中国の5大学のセンターに呼応した国際交流センター構想の実現について、立案から1年も経たないうちに、東京で正式に皆さんに対して、この計画を発表することができることは、楽観的な私でさえ予想するところではありませんでした。中国における中日青年交流センターの設立及び推進に、最初から関与してきた香港の良き友人たちとともに、日本において最初に国際青年交流センター構想を実現する早稲田大学中野国際コミュニティプラザの設立を心より歓迎、お喜び申し上げます。我々はこのプロジェクトを積極的に支持し、日中友好関係の発展のために、応分の貢献をしたいと思います。

<荻野正明様のお話>

2年以上前にこの日中青年交流センターの構想を曹氏から聞いた時に、今まさにやらなければいけないことはこれなんだと直感しました。以来、微力ながらお手伝いをしてきたわけです。日本には「寄付の文化」が育っていません。欧米は言うに及ばず、香港でも幼稚園から始まって小学校、中学校、高校が個人の寄付によって作られ、また、香港のどの大学に行って

も寄付によって建てられた建物が数多くあります。しかし日本の場合一部の私学系を除き、国公立を中心に、本当にそういう寄付によって建てられた建物が非常に少ないことに驚かされます。これからいろいろと紆余曲折があるかもしれませんが、大切なことは、日中の若者たちが交流することの意義を、常に自分の心に抱き続けることであると考えております。寄付する側と受ける側の間で、時には糊のような、またある時にはクッションのような役割を果たせれば良いという気持ちを持ちつつ、若者の持つ無限の可能性にかけてみたい、というのが今の心境です。

＜鎌田薫総長の話＞

奇しくも、早稲田大学の構想と、曹様の構想、柳井様のお考えが「早稲田大学中野国際コミュニティプラザ」で共鳴し、他に類例を見ない、国際連携による大規模な国際学生寮建設支援のスキームが実現いたしました。これは全くの偶然ではなく、むしろ歴史の必然と言って良いのではないかと考えています。今回、柳井様、曹様、荻野様から、早稲田大学に対して、破格のご支援をいただく旨の意思を表明していただいたことは、わが国の大学の国際化を大きく前進させる貴重な機会になり、他の大学や篤志家の皆さまにも大きな刺激を与えるものと確信しています。

■曹其鏞様について

香港の企業「永新企業」の副会長で、1958～1962年に東京大学工学部に留学。当時、都内の学生寮であるアジア文化会館に入居し、寮生活を通じて日本やアジアの学生と生涯の友人関係を築けたという。50年後の現在、悪化している中日関係を憂い、若者が共同生活を送ることで双方の国民感情を改善しようと、北京大学、清華大学、復旦大学、上海交通大学、浙江大学など早稲田大学と協定を結んでいる中国の5大学に私財計1億元（約13億円）をご寄付し、それぞれ「中日青年交流センター」として中国と日本の学生が入居する学生寮の建設を進めており、北京大学では昨年10月より運営されている。

■荻野正明様について

ファッションブランドや小売り業など20社以上を展開する国際企業グループ、フェニックスグループの会長。1941年大阪生まれ、神戸外国語大学ロシア文学科卒業後、商社を経て貿易会社の香港支店長となる。支店閉鎖を機に独立し、1970年にフェニックスを設立、日本向けニット製品の最大手に成長。上海、ベトナム、中国国境地域に工場を設立し、1986年にはプラダと契約。自社ブランドとしてアンテプリマも立ち上げ、ミラノコレクションのブランドとしてグローバルに展開している。1996年からは総合スーパーを香港、台湾、上海などに展開しており、グループは現在フェニックス・グループ・ホールディングスに集約されて運営されている。

■「早稲田大学中野国際コミュニティプラザ」における国際学生寮について

2014年度に中野区中野4にオープンする早稲田大学中野国際コミュニティプラザの中核施設となる学生寮。872名が入居可能で日本と多様な国・地域の学生が共同生活を通じて異文化・多文化を学ぶ。建物は鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造・P R C造）中間層免震構造の11階建。3～7階が男子専用フロア、8～11階が女子専用フロア。2階には多目的教室、フィットネスルーム、音楽室、大浴室、学生ラウンジ、一部の男子寮室。1階は地域社会に開かれた生涯学習の場づくりを提供する教育施設。

Event

第99回ABK 帯津良一先生講演会 「気功的生きかた 凜として老いる」

<先生の一言>あと15年、煮え滾るものを生きるかなしみで包んで凜として老いてみようか。

- 日 時： 2月21日(木) 19:00~20:30(開場:18:30)
* 講演終了後、15分程の気功実技指導(帯津式新呼吸法「時空」)を行います。
- 会 場： アジア文化会館(ABK) <東京都文京区本駒込2-12-13 / 都営三田線千石駅A1出口徒歩3分、JR山手線巣鴨駅/駒込駅徒歩約10分>
- 講 師： 帯津良一先生(帯津三敬病院名誉院長 / 日本ホリスティック医学協会会長他)
- 参加費： 3,000円(但し、協会会員・語学講座受講生 2,000円)
* 参加費は当日会場にてお支払いください。
- ご予約・お問合せ先：
(財)アジア学生文化協会 帯津良一先生講演会担当まで
TEL: 03-3946-4121(代) FAX: 03-3946-7566
E-mail: asca50com@abk.or.jp
HP: <http://www.abk.or.jp/abkd/news/index.html>

* 連続講座として設定していますが、それぞれ独立した話として聴講できます。

外国人相談従事者のためのセミナー(第2回) —相談者との文化の差異を乗り越え、持続可能な相談活動を実現するためには—

- 日 時： 2月23日(土) 18:00~20:00(17:45開場)
- 会 場： 板橋区グリーンホール 503会議室
- 講 師： 田中 ネリ(千葉メンタルクリニック・四谷ゆいクリニック・臨床心理士)
- 内 容： ①外国人住民支援のための異文化間心理学(講義)
②相談者との間の文化の差異を乗り越えるには(個人ワーク・グループワーク)
* 内容は予定です。一部変更になる可能性もあります。
- 対 象： 外国人相談従事者及び関心をお持ちの方
- 参加費： 無料
- 申 込： 担当・加藤(jotaro33@gmail.com)まで、予めメールにてお申込みください。
件名を「第2回セミナー参加希望」とし、本文にご所属、お名前、メールアドレスをご記入ください。
- メ 切： 当日まで申込を受け付けます。(お早目のお申込みをお待ちしております。)
- 主 催： 特定非営利活動法人 ASIAN PEOPLE'S FRIENDSHIP SOCIETY (APFS)
TEL 03-3964-8739 / Fax 03-3579-0197
E-mail apfs-1987@nifty.com / HP <http://apfs.jp/>



※各情報の詳細は主催団体ホームページ等でご確認ください。奨学金情報は、日本留学情報データベースサイト = JPSS (<http://www.jpss.jp/ja/>) にて検索が行えます。

じょうぼう イベント情報

KANAGAWA CAREER EXPO 2013

外国人留学生・キャリアのための合同会社説明会。「グローバルな経験・能力を活かしたい！」
そんな方々の為に、グローバルな企業（41社）を集めた就職説明会です。学校・仕事が忙しい
方も、ゆっくりと企業の担当者と話すことができる絶好のチャンスです！

開催日程： 2013年2月14日（木） 11：00～17：00

会場： 新都市ホール（横浜駅東口横浜そごう9階）

参加対象： 外国人留学生、外国人キャリア（2013年度・2014年度卒業見込み者・
既卒者も参加OK！）

参加予約： <http://www.ryugakusei-job.com/>

主催： 神奈川県、神奈川新聞社、日総ブレイン株式会社

りゅうがくせい 留学生 スキー&スノーボード交流会

いろいろな国からの留学生や日本人の若者が数多く参加するこのイベント。ウィンタースポーツやパーティーを通じての楽しい国際交流に参加してみませんか？

日本での貴重な思い出となるだけでなく、新しい友達がたくさんできる絶好のチャンス！

舞台となる『キューピットバレイ』はゲレンデはもちろん、食事も部屋も温泉も最高です。スキーやスノーボードが上手な人も初めての人も思いきって参加してください。

募集人数： 約90名（日本人学生含む）定員になり次第メ切

実施日程： 2013年2月24日（日）～27日（水）※車中1泊、コテージ2泊

スキー場： キューピットバレイ・スキー場（新潟県上越市）

参加費用： 29,400円

参加申込み： http://www.kokusaikoryu.com/event/ski_board/index.html

主催： 特定非営利活動法人 国際青少年交流協会

外国人留学生対象 就職フェア

外国人留学生を採用したい企業(25社)が集まり、直接採用担当者から"会社情報"や"採用情報"を聞くことができます。留学生の皆さんから直接質問もできます。

日時: 2013年2月10日(日) 10:00~18:00 (受付開始:9:30)
対象: 外国人留学生(大学・大学院を2013年4月~2014年3月卒業予定の方)
 ※ 転職希望者は対象としておりません。ご注意ください。

会場: 秋葉原 UDX Gallery 4F
 (JR 秋葉原駅徒歩1分 / 東京都千代田区外神田 4-14-1)

参加申込: WEB サイトより→ <http://www.global.worksjapan.co.jp> (参加費無料)

主催: 株式会社ワークス・ジャパン

MEMBERS

〈会費とご寄付の報告〉

2012年10月

特別会員

(5口)
 (株)スリーエーネットワーク
 千代田区

(1口)
 NOVEL ENTERPRISES
 LIMITED 香港
 立命館アジア太平洋大学

別府市
 (株)シーボン 港区

賛助会員

(1口)
 (株)エレクトロデザイン
 中央区
 亜細亜大学 武蔵野市

正会員

(1口)
 杉浦 義昌 名古屋市

佐藤 和江 日野市
 樋口 敏子 塩尻市
 石川 毅/優子 北区
 小野里 光博 文京区
 (有)プルミエ(アクア)松戸市
 小山内 美江子 横浜市

ご寄付

鶴尾 能子 横浜市
 佐々木 善子 国立市

2012年11月

賛助会員

(1口)
 雅留宮 久麿/澄子 野田市

正会員

(1口)
 木下 幹康/澄江 狛江市
 萩原 伊助 千葉市
 広江 重徳 浅口郡
 清水 恭子 練馬区
 中島 明彦/絢子 横須賀市

対馬 節子 品川区
 藤田 淑子 文京区
 金野 隆光 柏市
 福本 一 船橋市

ご寄付

栗原 静子 気仙沼市
 西垣 幸朋 足立区
 齋藤 美知子 富里市
 金野 隆光 柏市
 山口 憲明 日野市

今回もたくさんの御協力をいただき、ありがとうございました

ご報告

ABK同窓生募金 (2012年11月30日現在)



ご協力ありがとうございました。募金のご報告は『アジアの友』並びに同窓会ホームページ < <http://www.abk.or.jp/abkd/fund/houmeiroke.html> > で随時ご報告させていただきます。

●目標額：5,000万円

●募金額：46,222,142円 (目標残：3,777,858円)

●寄付者数：832件

〈 〉内は出身・在住国、地域、ABC順

<ブラジル> Hiromu Onishi (大西博巳) <日本> 50周年記念事業委員会、広江重徳、来山文泰、西垣宰朋、西川恵、小木曾建、酒井杏郎、外山経子、鶴尾能子、山崎光郎<マレーシア> 2012年ABK在館マレーシア留学生、Ariel Cheng (鍾欣霖)、Siew Soke Lee、Tan Ai Lak (陳愛麗) <台湾> Lim Pi Chi (林丕繼) <タイ> Vilai Tomorakul

以上、17件

2012年9月30日以前の寄付者 (815件)

<バングラデシュ> A.K.M. Moazzem Hussain、Hashimoto Islam Nurul (橋本イスラム・ヌルール、在日)

<ブラジル> Alberto Tachibana、Alice Nakamori、Francisco Ishihara、Hashiguchi Mariuza、Matsubayashi Marcia、Mizuma Tachibana Aiko、Nelson Yamakami、Sekiya Tachibana、Tomooka Tizuko、Yamauchi Atsushi、Yamauchi Kazuko

<カナダ> Chang Sou Wah (張素華、香港)

<中国> (C) Cai Jian Ping (蔡堅平、在日)、Chen Hong Zhen (陳洪真)、Chen Xian (陳獻)、(D) Dai Zhi Jian(戴志堅 / 陳艷萍、在日)、(G) Gao Rong(高榮)、(H) Hironaka Gunji[広中軍二(李軍、在日)]、(J) Jia Fu Zhong (賈輔忠)、Jia Hui Yi (賈蕙萱)、Jin Qiu (金秋)、Jing Dong Huan (金東澣)、(K) Kuo Nan Yan (郭南燕、在日)、(L) Lee Chun Li (李春利、在日)、Li Chen Xi (李晨曦、在日)、Li Hui Chun (李惠春、在日)、Liu Ming Hua (劉明華)、Liu Ying Chun (劉映春)、Liu Yue (劉越、在日)、Lu Xin Yi (呂新一、在日)、(M) Meng Ling Hua (孟令樺 / 計宇生、在日)、Meng Xiao Xiao (孟瀟瀟)、(N) Ni Yu (倪玉)、(O) Ou Yang Fei (歐陽菲、在日)、(P) Piao Shun Yu (朴順玉)、(Q) Quang Hao (全浩)、(S) Sha Lian g Xiang (沙蓮香)、

Shang Jie (尚捷、在日)、Sun Qian Jin (孫前進)、(W) Wang Wei (王巍)、Wang Wen (王穩)、Wei Qing Ding (魏慶鼎)、(Y) Yan Hao (嚴浩)、Yang Yi Fan (楊一帆)、(Z) Zhan Xin (張新)、Zhan Xin Wang (張新旺)、Zhang Hang (張航)、Zhang Yong (張勇、在日)、Zhou Xiang (周翔・黄軼)、張建敏

<ドイツ> Heng Fu Chong (マラヤ)

<香港> Chan Sui Ngan (陳小雁)、Choi Man Wa (蔡敏華)、Leung Chi Shun (梁志瞬)、Yeung King Hong (楊經航) / 蔡金燕 (マレーシア)

<インド> AAWI (AOTS Alumni Association of Western India)、A. P. Wagle、ABK-AOTS Dosokai Chennai Center、Abul Sarah、Ashok Saraf、Grug Kumar (雅留宮久磨 (在日) / 澄子 (日本))、M. Ramamurthy

<インドネシア> Budhi Setiawan Kohar

<イラク> Mudhafar Al. Jabiri

<カンボジア> 忍足林基 (在日) / 美恵子 (日本)

<日本> (A) ABK 留学生友の会、赤星裕、新谷美紀子 / 美也子、安藤哲生、新井敬二・由利、新井重光、荒川雄彦、アジアの新しい風、(C) Ch atty B.Q. (ワタナベ)、近山武子 (3)、千野克子、(F) 藤原一枝、深澤のぞみ、福譲二、福本一、古川恵世、布施知子、(G) 50周年委員会売上 (4) (H) 濱田洋子、浜崎長壽 / 和子、秦幸吉、橋口真人、林均、樋川好美、平井まりこ、平峯克、平岡昭子 (2)、平田熙、帆刈礼子、堀香奈美、堀幸夫、堀内智代子、細川哲士、穂積亮次、(I) 井出遊、飯沼英郎、池田俊二、池森亮介、池野朋彦・晶子、池添尚行、稲垣敏彦、井上恵子、井上駿、犬塚雄大、伊佐玲子 (2)、稲澤宏一、石原廣、石原誉慎、石井信彦、石川毅・優子、伊藤郁子、伊藤順 (3)、伊藤源之 (2)、岩井秀明 (2)、岩尾明、岩佐佳英、岩崎幸子、(K) 甲斐等、加倉井弘行 (2)、兼重節、兼重道雄、兼重智雄、勝部純基、香月恵美子 (2)、河合秀高、川上剛 (2; 在スイス)、川崎依邦 (OCE)、北マツ、北川泰弘、北原千絵、北山文泰 (2)、倉部絹代、小林浩、小林泰子、小宮信介、金野隆光 (3)、久保哲也、久保木裕一郎、工藤正司、工藤幹雄 (5)、熊沢敏一、倉内憲孝、栗原静子 (2)、黒田一雄、黒羽宏、久津間優子、(M) 町田恵子、町田航、牧美保子 (2)、榎操、馬杉栄一、松平吉世、松井正枝 (2)、松岡弘、松崎松平 (2)、真弓 忠、宮野尾光正、宮内俊治、水須善幸、森尾正照、森下明子、村田忠禎、村山秀男、(N) 中原和夫 (2)、中島正喜 (2)、中嶋源吾、中元菅根 (2)、中村洋一、中野正明、中曾根信 (3)、日本養成学会、西田祥子、西垣宰朋、西原彰一、西嶋勝彦、西本梶、西村清人、西谷隆義 (2)、新田宣子 (2)、仁田裕子、野田 (小金丸) 春美、野口明美、野村美知子 (3)、(O) 小田中聡樹、小川巖、小川輝夫、小木曾大 (2)、小木曾建、小木曾友 (3)、小倉尚子、小原正敏、大西一郎、岡島昭治、岡崎道子 (2)、大木直美、大久保伸枝、大野大平、大里浩秋、大島光恵、岡部洋一、奥山節子、奥山義夫、大村光、小野寺武夫、小野里光博、大澤龍、忍足絵美、忍足眞理、大杉立、大谷里恵子、(R) 六文会、(S) 斉木史、斉藤雅史、齋藤美知子、齋藤やす子、酒井杏郎 (2)、榎正義・正子、酒巻彩乃、坂元ひろ子、三溝弘悦、早乙女和義・

博子、佐藤郁夫、佐藤正文 (2)、佐藤玲、澤登千恵子 (3)、関正昭、渋谷寧伸、清水国夫、清水勇治・泰代 (2)、篠塚景市、白石勝己、白石勤、白鳥文子、代田泰彦、尚美学園大学国際交流センター、染谷公久、染谷誠、總寧寺、菅原照代、杉本宏樹、杉浦貴和子、杉山兼一、栖原暁、鈴木繁、鈴木智、鈴木八重子、鈴木順子、(T) 田川明子、田口久美子、田口昌子、田尻英三、高道俊彦 (3)、高木桂子、高橋喜久江、高橋満、高橋作太郎 (2)、高橋幸枝、高橋雄造、高野靖子、高柳直正、竹林惟允 (3)、竹田肇・和子 (2)、竹嶋俊紀、宅間薫 (2)、田守智恵子 (2)、田中千佳子、田中雅幸、田中美智子 (2)、田中利恵子、田中紳一郎、田中多美子 (2)、田中稔子・静子、谷口哲雄、寺門克郎 (2)、寺尾方孝・三枝子、寺沢宏次、田井満里、田井良知、田井亮吉、戸田清、鶴田純一・由美 (3)、東京華僑総会、富岡昭二郎、外山経子 (9)、豊島由久、土屋元子 (2)、土屋幸子、佃吉一 (2)、鶴尾能子、堤祐子 (2)、(U) 内山敦之、宇戸清治、上高子、上田菜生、植田泰史、畝本昌介、漆嵐才子、(W) 渡辺讓二、(Y) 藪下勝、山田健一、山田守一、山田裕子、山口憲明 (3)、山本斉、山本出、山本章治、山野井昭雄、山之内正彦・萩子、山下靖典、山海保、山崎光郎 (3)、山口誠、依田良子、横山昌幸、横沢喜久子、横山昌幸、吉原秀男、吉田裕子、吉田菜穂子、吉原エツ子、吉川英一 (在中国)、湯山佳代、匿名希望 (4名)、

<韓国> 崔銀珠 (在日)、Hahn Young Khoo (韓英鳩)、西原景哲 (在日)、Oh Bum Suk、Youn Seong Kook (尹誠國、在日)、Woo Su Keun (禹守根、在中国)

<ラオス> Chanthasone Inthavong (在日)

<マレーシア> 2011年11月12日留日学生同窓会パーティー一同、(A) Adelyn Ngo、Amy Tan (陈春莲)、Alan Tan Yu Poo、Ang Gi Moh (洪以谋)、Ang Khoo Chye (汪坤才) (2)、Ang Lip Chee (洪立志)、Ang Sheng Feng (洪巧芬)、Ang Wan Leng、Apple Vacation & Conventions Sdn. Bhd. [苹果旅游有限公司; Koh Yock Heng (許育興)], Aw Leong Gee (欧良義)、(B) Beh Chor Kim、Beh Teck Chuan、Boon Woo Seng (温武成)、(C) CM Aung、Cha Yee Seng (謝宇誠)、Chai Koo Peng、Chan Huan Pang (曾煥邦、2)、Chan Kok Foo (陳国富)、Chang Chew Chin (張昭成) (3)、Cheang Chuan Ley、Cheang Sai Keong (シンガポール)、Charles Chow (邹贵璋)、Chaw Kam Shiang (周錦生)、Cheah Soo Lin、Cheong Bee Nah (鐘美娜)、Chew Ching Seng (周昌盛) (2) /Low Kim Lee (刘金莉)、Chew Fook Keong (周福强) /Goh Ger Teng (呉月婷)、Chia Hong Hyiap (謝鴻業)、Chia Li Teck (謝礼得)、Chia Mee Hang (蔡美賢)、Chin Yok Wan (陳玉旺) (2)、Chin Saw Kiun (陳少勤、在日)、Chiu Jin Eng (冰周人英) / 林惠冰、Chong Piang Wee (张炳辉)、Chong Teek Foh (張德福) (2) /Chow Soo Lin、Choo (2)、Yun Fah、Choong Chee Yee、Choong Yoon Seng、Chow Kwee Lin (邹貴仁)、Chuah Yeon Hang (蔡耀漢) / Keong Chin Huai (強青懷)、Chuan Seong Tiang (Jeff Tiang)、Chui Wai Kong (朱威金光)、Clifford Lee (李進才)、(E) Ee Ley Tiong (余励忠) (2)、(F) Fong Cheong Thiam (洪昌添)、Fong Wee Keat、Foo Hee Hiang (符氣強) (2)、Foo Keah Keat、Foo Ming Lian (符明蓮)、Foo Siang Seng (符祥盛) (2)、Foo Soo Kong (符素光) (2)、Foo Yuki (符優綺)、(G) Gan Kok Seng (顔国成)、Gan Seu

Kian (顔綉涓)、Gan Teck Yeow (顔得耀) (2)、Goh Peng Ooi、Goh Swee See (吳瑞獅)、(H) Ham Poh Can (范宝权)、Ham Poh Chyan、Heong See Yoon (香世运) (2)、Hew Boon Thai、How Chai Nguan (侯再源)、(J) Joan Wai Kim Foh、(K) Kang Chin Yeh (江晋業)、Kenneth Wong (黃復翔) (2)、Kevin Ng (吳錦強)、Khu Hwa Leng (邱華龍)、Koh Hong Hwee (許鴻輝)、Kong Guan Wie (江元偉)、Kong Kwee Song (江回松)、Kong Sian Shih (江幸柿)、(L) Lai Yoon Poh (赖永保)、劉・有村開順、Lau Kok Yong (刘国荣)、Lau Sau Hong (劉少峰、在日)、Lau Shiang Horng、Lau Weng Wah (刘润华)、Lee Check Poh (李

2012/11/30 現在 ABK 同窓生募金国別集計

国・地域	件数	合計額	備考
日本	355	19,348,712	含、在外/同一人複数回
マレーシア	318	13,706,656	含、在外/同一人複数回/日本人26/シンガポール1
タイ	51	6,856,007	内日本人17
中国	42	2,455,000	含、在外/在日他
ベトナム	7	1,423,000	含、在日
ブラジル	14	657,627	
韓国	7	420,000	含、在日他
カンボジア	1	300,000	在日
シンガポール	8	380,140	含、在日
インド	7	190,000	含、在日
香港	4	170,000	
台湾	10	175,000	含、在日
ミャンマー	1	50,000	
バングラデシ	2	40,000	含、在日
イラク	1	10,000	
インドネシア	1	10,000	
パキスタン	1	10,000	在日
ペルー	1	10,000	在日
ラオス	1	10,000	在日
合計	832	<u>46,222,142</u>	

目標残	3,777,858
-----	-----------

志保) /Ng Sui Ying (黄瑞英)、Lee Chee Heong (李志雄)、Lee Kian Ling (李建霖)、Lee Kian Ling (李健霖)、Lee Kong (李廣) /Lam Chok Yak (2)、Lee Leong King (黎亮景)、Lee Liong Mui、Lee Miow Ying (李妙英)、Lee Mow Tiam (李茂添) (2)、Lee Tee Boon (李智文) (2)、Lee Tiam Hing (李天興)、Lee Yuet Keong (呂月強) /Kek Sai Fong (郭思坊)、Leong Khee Hoo (梁其和) (2)、Leong Thiat Eng (梁德榮) (2)、Leong Wing Sum (梁永森)、Lew Kim Song (劉金雄) (2)、Liau Kok Wee、Liw CK (廖俊光)、Liew Teck Boon (劉德文) (2)、Lim Bok Hek (林木火)、Lim Chee Tian (林志田)、Lim Chin Kok、林月秋 /傳亮 (中国)、Lim Chin Ee (林振意) (3)、Lim Chong Chan (林忠贊)、Lim Hock Lai (林福来) (2)、Lee Li Soon、Lim Liong Chu (林良住)、Lim May Yan (Mmrcia Lum May Yan) (2)、Lim Peng Jin (Scientex Japan Co., Ltd.)、Lim Sin Yean (林欣燕)、Lim Soon Hang (林顺桁)、Lim Suat San (林雪珊)、Lim Thian Huat (林天发)、Lim Yok Chai (林意財)、Loh KC (羅国

俊)、Loke Hon Yee (陆汉宇) (2) /June Tan (陈素芯)、Low Cho Kee (刘助基)、Low Han Peng (刘汉平)、Low Kim Lee (劉金莉)、Low Leong Meng (羅亮明)、陸培春留日センター、Lwee Lew Chen (雷柳菁)、Lwee Yuen Chiang (雷远江)、Lwee Yuen Tung (雷远东)、(N) Na Chin Teong (藍振忠)、Ng Chee Meng、Ng Chin Keong (黄振強) (2)、Ng Chuan Aik (Tony Cang ; 黄泉毓)、Ng Eng Hooi (黄永輝)、Ng Kim Chai (黄金財) (2)、Ng Mee Wah (吳劍華) (2)、Ng Teong Guan (黄忠元)、Ng Thian Eng (黄殿英)、Ngiam Tee Seng (嚴世清) (2)、Ngwan Boon Ming (阮文明)、(O) Ong Cheng Chuan (王清川)、Ong Cheng Han (王清漢)、Ong Ching Long (王建龍)、Ong Chooi Lee (王翠莉)、Ong Poh Heng (王宝慶)、Ong Thye Beng (王泰明)、Ong Wei Bing、Ong Yee Meng (王玉明)、(P) Pang Choon Boon (彭俊文)、Pang Pow Kwee (方宝貴)、Pang Yuet Hueng (彭月紅)、Phang Siew Kiong (彭修強)、Poh Siew Hui (傅秀慧)、Puah Chin Chye、(Q) Quah Saw Ting、Quah Soh Teah、(S) Sam Cha Peng (覃澤平)、Seah Boon Chieng (謝文清)、Shia Wei Jong (余維忠)、Siau Fook Siong (箫福祥)、Siew Kooi Kam (萧钜金)、Siew Moey Yen、Sim Ee Looi、Sim Eng Kang (沈永江)、Sim Kee Hong (沈其豐) (2)、Sim Kim Ling、Simon Liow (廖天發) /Ho CL (何俛伶)、Soo Ka Jin、Soo Kee Chee (蘇克智)、Soh Keh Woei (蘇克偉) (2)、Soo Seck Heng (苏锡兴) (2)、Soon Kian Seng (孫健勝)、SKK Kaken (M) Sdn Bhd、Soon Sai Kheng (宋世勳)、Stanley Lian、Su Kui Sheng (蘇桂昇)、Sui Kwai Chan、(T) Tan Boon Liang (陳文亮) (2)、Tan Chaik Kwang (陳澤光)、Tan Chee Kiong (陳志強)、Tan Chee Teong (陳治中)、Tan Cheet Yong (唐志勇) (2)、Tan Chew Mooi (陈秋妹)、Tan Hwee Ing、Tan Keah Moh (陳佳茂)、Tan Kee Hang (陈继汉) (3)、Tan Pang Tee (陈邦智)、Tan Peck Ming (陳碧明)、Tan Peck Ming (陳碧明)、Tan See Seng (陳時生)、Tan Soo Sin (陳素芯)、Tan Wee Pin、Tan Wee Seng (陈为胜) (2)、Tang Eng Huat (陳永發) (2)、Tang Gek Eng (陈玉英)、Tang Kok Lian (湯国亮) (3)、Tang Miow Chin (湯妙晶)、Tay Kiam Guan (鄭謙源)、Tee Choon Hong (2)、Tee Kian Meng、Teh Chong Yee (鄭忠義) (2)、Teng Kim Yin (鄧錦雲)、Teo Bee Hong (張美宏)、Teo Boon Lian (張文連)、Teo Chuan Soon (張川順)、Teoh Eng Choo (張映水)、Teo Kian Song、Teo Kim Chuan、Teo Kwee Swee (张贵水) (2)、Teo Tiam Hwa (張添華)、Teoh Eng See (張映絲)、Tey Khern (郑勤)、Tey Kian Teong (鄭建忠)、Tham Kok Who、Thye Meng Yu (鄭茗友)、Tiang Chuan Seong (鄭俊雄)、Toh Leong Chee (卓良志)、Toh Peng (杜平)、Ung Yat Keat、(W) Wong Chao Hsiung、Wong Chee Ken (黄啓耕)、Wong Chin Shiuan (黄晋軒) (2)、Wong Choon Leng、Wong Fee Ping (黄慧萍)、Wong Jiunn Shyong、Wong Ka Seng (王家成)、Wong Kim Choy、Wong Kim Choy、Wong Kok Hoi、Wong Kuok Hung (黃國鳳)、Wong Mei Kin、Wong Seng Keng (黄成耕) (2)、Wong Sheong Chin (黄錄进)、Wong Tzong Chyang (黄宗強) (2)、(Y) Yap Men Fatt、YB Liang Teck Meng (梁德明)、Yeung King Hong、Yew Kuen Ying (姚群英)、Yew Siew Leong (姚瑞良)、Yong Chin Chew (楊清洲)、

Yap Geng Yi (叶耿瑜)、Yong Hwee Yan、Yap Shin Woei (葉信偉)、Yew Siew Leong (姚瑞良)、Yong Cheng Yun (楊青雲)、Yong Hon Wee (楊漢威)、Yong Kian Teck (楊建德)、Yong Kok Lin (楊国霖)、匿名希望 (1)

(B) 坂東慶彦、(F) 藤田陽一、深民崇夫、(G) 五条章二、(I) 石原政一、伊藤要、稻田幸司、(K) 越場直樹、(K) 工藤英弥、河野修、小松電機産業 (株) 代表取締役小松昭夫、(M) 水田康広、水野伸明、森下治幸、(O) 大須賀稔晴、貞包物産 (株)、(S) 柴田保、下村安秋、白石和也、SKK Kaken (M) Sdn Bhd、(T) 田中公治、塚本秀幸、(Y) 山内一弘、山川勇人、山縣みさ、山根行弘

<ミャンマー> Aung Kyaw

<パキスタン> A. R. Siddiqi (在日)

<ペルー> Olga Shimada Keiko

<シンガポール> Chia Guan Sey (謝元生)、Foo Choo Wei (在日)、Foo Yong Tse、顔尚強、王癸其、Tan Choon Shian、Wong Meng Quang

<台湾> Chen Ai Chi (陳艾圻)、張忠信 (在日)、李淑維 (維維)、Lin Pi Chi (林丕繼、在日)、林登居・斎藤ヒサ子 (在日)、Liu Li Mei (劉麗美)、堤井信力 (在日)、廖婉淑、陳俊銘 (在日)

<タイ> (A) ABK and AOTS Alumni Association (Thailand)、Asami Hiroko (浅見博子、在タイ)、(B) Bandihit Rojarayanont、(C) Chamlong Srimuang、Chanintorn Mekaratana、Chovet Yimsirikul、(D) Ditdi Chatputtongul、(G) Gannigar Koontanakulvong (2)、(I) Itti Rittaporn、(K) Kanzaki Sorda (神崎ソラダ、在日)、Kornkeo Praisontarangkul、Kraisorn Throngnymchai (在日)、Krisada Visavateeranon、(M) Meena Thamchaipenet、Mongkol Pianapitham、(N) Navarat Srisuponvanit、Ngampho Patrawut、Niramai Thanatavee、(O) Onozaki Tadashi (小野崎忠士、在タイ)、(P) Patamavadee (Bongsayan) Narushiso、Phiphat Chaichanavichakij、Pilaipan Mekaratana (2)、Pisan Thanatavee、Pholchai Limviphuvadh、Pornanong Niyomka H.、Prayad Kongkasawad、Prayoon Shiowatana、(S) Sathida Mekaratana、Saowanee Patrakarn、Shintaku Hikaru (新宅光、在タイ)、Sivaporn Sirilatthayakorn、Sucharit Koontanakulvong (2)、Suchittra Hunbuncharkit (2)、Supong Chayutsahakij、Suthee Chutchaiwett、Suvit Vibulsresth、(T) Technology Promotion Association (Thailand-Japan) (TPA; 泰日経済技術振興協会)、Thai-Nichi Institute of Technology (TNI; 泰日工業大学)、Tana Tangtrongsakdi、(V) Vachiranee Limviphuvadh、Vachiraporn Limviphuvadh、Virat Thiravathanavong、(W) Wannadee O'sorup、Wiwut Tanthapanichakoon、(Y) Yanase Shuzo (柳瀬修三、在タイ)、Yoshiko Limviphuvadh

<ベトナム> Dao Thi Minh (在日)、Dong Du (ドンズー日本語学校)、Le Quynh Chi (在日)、Nguyen An Trung、Tai Anh Tien (在日)、To Buu Luong (在日)、Tran Thanh Viet (在日)

おたより

I want to take this joyous auspicious occasion to wish you a peaceful, blissful, prosperous, and successful New Year 2013 (B.E. 2556; Heisei 25).

Wiwut Tanthapanichakoon, Prof. Emeritus, Chulalongkorn University (CU) Prof., Tokyo Institute of Technology (TITech) and concurrently, Adjunct Prof. of Kyoto Univ.(在日、タイ)

To all friends of Asia Bunka Kaikan
merry christmas and a happy new year.
Heng F.C.(在ドイツ)

Merry Christmas and Best Wishes for the New Year
P.A.H.Fernando (在ニュージーランド、スリランカ)

Wish you a Happy, Healthy and Successful 2013
M.R.Ranganathan (インド)

On the occasion of coming christmas and new year events, we would like to thank for all your support and wish you a healthy and happy new year. Best Wishes,
Sucharit and Gannigar (タイ)

Wishing you a Merry X'mas.
Myint Wai, Chairman, Waminn Group of Companies/President, Myanmar Association of Japan Alumni (ミャンマー)

Wish you and ABK staff a merry christmas and very happy new year. may God bless Japan. I tried to make you a card in Japanese. Excuse my mistakes. I hope you like it. take care!

TITLI BASU, Doctoral Student, School of International Studies, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, India (インド)

Shinnen akemashite omedetou gozaimasu.
Myint Wai, Chairman, Waminn Group of companies (ミャンマー)

X' mas Greeting Card 張 素 華 (Vhang Sou Wah ; 在カナダ、香港)

今年(2012年)1年、皆様にはいろいろとお世話様になりました。日本では、年も押し詰まって政権交代があり、年明け早々に本格的な新しい体制に向け動き出すことになるのかと思われます。使い古された感のある言葉ですが、2013年は日本にとってもタイを含むアジアにとっても「激動」が予想される年という感じがします。こうした状況の中で生きられることが幸せか否かは各個人で見解の別れるところだと思いますが、歴史の一証人として、しっかり目を見開いて来る2013年を迎え、それに向かっていきたいと考えている年の暮です。良いお年をお迎え下さい。そして、来る2013年が皆さまにとって良い年でありますよう祈念致します。小野崎忠士(在タイ)

Akemashite Omedetto gozaimasu! 2013 be arriving soon. May you have a blissful, lovely year. All the best to you ! Best wishes from Gary Tang & Family (マレーシア)

All the best for a Happy and prosperous New Year 2013
Mudhafar Al Jabiri (イラク)

Wishing you a Merry Christmas and a New Year of Peace and joy

Mr. Supong Chayutsahakij (タイ)

迎春 謹んで新年のお喜びを申し上げます。旧年中は、格別のご厚情にあずかり、心よりお礼申し上げます。本年もより一層尽力して参りたいと存じておりますので、何卒、昨年同様のご哀願を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ドンズー日本語学校 校長 グエン・ドク・ホエ (ベトナム)

新年明けましておめでとうございます。

年頭にあたり、ご家族の皆様のご健勝、ご多幸を祈念申し上げます。何時も大変お世話になり、誠に有り難う御座います。

本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成二十五年 元旦。

シッター センファフン (SITTHA SANFUENG FUNG SITTHA & ASSOCIATES LAW OFFICE、タイ)

Happy New Year 2013 Wish you a Prosperous, Healthy, Wealthy, Successful & Blissful Year. Best Wishes. Maliwan Dejaritt (タイ)

明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします。

Foo Hee Hiang (マレーシア)

明けましておめでとうございます。先生のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。ウェイ維 (台湾)

新年明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします。Tan Chee Teong (マレーシア)

明けましておめでとうございます。皆様のご健康とご多幸を心からお祈り致します。

本年もよろしくお願い致します。(^ ▽ ^) Sunny Pang (在日、マレーシア)

謹賀新年 昨年中は大変お世話になり 誠にありが

とうございました 本年もご指導ご鞭撻の程 よろしく願い申し上げます。平成 25 年元旦 ブラジル広島県人会 会長 大西博巳 役員一同 (ブラジル)



マレーシア・ジョホールバルで2012年11月22日に開催された第7回四木会。場所は The Bierhaus (Sentosa 阿坤魚丸正対面)



12月27日(木)、マレーシア・ジョホールバルで第8回四木会兼第1回忘年会が、The Bierhaus German Pub. にて開催されました。この会は、ABK 同窓生募金を契機に始まりました。ご覧の通りとても気軽な集まりだそうです。まだ続きますので、ぜひ一度ご参加ください!

ABK同窓生募金・目標ゴールまで

244,111

ABK同窓生募金・目標ゴールまで
2012年11月23日現在
244,111円

マレーシアの同窓生募金発起人会が、ABK 同窓生募金の最後の 300 万円の募金に向け、ABK 同窓会 facebook で次のような呼びかけを始めました。たくさんの関係者の方々に 1 口募金をお願いする次第です。よろしくお願いいたします!!!

ご来館



ミャンマーのミンウェイ (Mynt Wai, 東京工業大学卒、元 ABK 在館生、元 AOTS 研修生) さんが、2012 年 11 月 23 日、40 年振りに ABK を来訪されました。ミンウェイさんは今、ミャンマーの元日本留学者協会 (留学生、JICA、AOTS の元研修生など、帰国生全部を含む) の代表を務めておられます。



ベトナムのクワン (Quang Tien Nguye、元蒼生寮生、アメリカ在住) さんが 2012 年 11 月 28 日、久々に来館されました。



マレーシアの莊賜鏘さん (Ch'ng Soo Bee, ABK 日本語コース 1991 年度生) が、出身校の青山学院大学空手道部の創立 65 周年記念のため来日し、空手演武会に出演。2012 年 11 月 29 日、ABK を来訪されました。



マレーシアの Foo Hee Hiang さんご一家 (奥様、ご息女、ご息子) が、長女優稀さん (ABK 日本語コース在学中) 訪問と観光で来日、12 月 12 日、ABK を来訪されました。奥様も ABK 日本語コースの卒業生。卒業後初めての来日で 25 年ぶりとのことでした。

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名称：財団法人アジア学生文化協会

ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION

(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設立：1957年（昭和32年）9月18日

故穂積五一氏創設

目的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

- (1) 留学生宿舎の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員 1口 1万円

賛助会員 1口 5万円

特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円（学生2千円）でお送りしています。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

後記

本誌「アジアの友」が今号で500号を迎えた。1958年に創刊され、その後1961年3月号から月刊誌として出発させたのが瀬川保さん。本誌33号からだ（本誌の田中宏さんの記事参照）。深緑色の台紙に白字でくりぬかれた穂積先生の書、「アジアの友」の文字がとてもシンプルで凛とした印象の表紙は、それから1988年2・3月号（261号）まで長い間会員に親しまれた。その後、時代の要請等、諸事情で何度もサイズも表紙のデザインも変えながら今日に至っている。なお、今は、財政的な事情で隔月刊となっている。そこで、創刊から50年を超える本誌の歴代の編集者に集まっていた話していただくのも現実的でない。鬼籍に入られた方もいる、連絡の取れぬ人もいる。そんなことで、比較的長期間編集に携わり、創設者の穂積先生とその時代を共にした初代編集長の小倉尚子さん、田中宏さん、工藤正司さんのお三方に、担当当時の思いでや本誌の今後に寄せるメッセージ等をご寄稿いただいた。（F）

1月7日に行った本誌の座談会は、久々の放談会でもあり長時間にわたり、話題も多岐にわたった。人生・経験豊富な元留学生たちは、日々自国の情勢、近隣諸国の情勢、それに世界の情勢に関心を寄せ日本で生活していることを再認識させられた会でもあった。今、世界が急速に変化している中、日本にはそうした変化に対応できる総合的な機関がない。従って対外的な対応が遅れがちだと。各国事情を研究する機関をつくり危機管理・安全管理に対応する必要があるのではとの話題で盛り上がったが、直後、アルジェリアのテロ事件が起き、やはり情報が錯綜した。（F）

アジアの友 2012年12月号・2013年1月号

2013年1月20日発行（通刊第500号）

年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円） 1部 500円（税込）

発行人 小木曾 友
編集 アジアの友編集部
発行所 財団法人 アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)
電話番号：03-3946-4121 ファクシミリ：03-3946-7599
振替口座：00150-0-56754 E-mail：tomo@abk.or.jp
ホームページ：(http://www.abk.or.jp/)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599

Email：tomo@abk.or.jp

Home Page：http://www.abk.or.jp/

「アジアの友」の購読会員（年3,000円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。

「ABK 同窓生募金」へのご協力のお願い

(財) アジア学生文化協会では、現在、下記の通り、「ABK 同窓生募金」を行っています。おかげさまで、沢山の同窓生、関係者のご協力を賜り 2012 年 12 月末までに約 4,700 万円の募金を集めることができました。これもひとえに皆様の御協力の賜と存じます。目標の 5,000 万円まであと一息です。新校舎の完成を予定している 2013 年 3 月末までにぜひとも皆様のお力をおかりして目標を達成することを願っております。つきましてはまだご協力をいただいていない沢山の同窓生、関係者にご賛同とご支援をいただきたく、改めてお願いいたします次第です。なお、この度の「ABK 同窓生募金」への寄付者のお名前は、金額の多寡にかかわらず新校舎に掲げる銘板に刻印し、長く保存させていただく予定です。世界的な不況の折、真に心苦しい限りですが、何卒、ご理解とご協力をくださいますようお願い申し上げます。

財団法人アジア学生文化協会 (ASCA)

理事長 小木曾 友

募金内容

1. 名称 同窓生募金
2. 目標額 50,000,000 円 (伍千万円也)
3. 寄付金額 一口 10,000 円 <一口未満でもお受けします。但し、一口未満の時は 1000 円以上でお願いします>
4. 使 途 ABK が設立する学校法人の「運営資金」に当てる (注)
(注) 学校設立には、校舎建設資金 (約 5 億円) のほかに、教育の健全性を保証するために「運営資金」 (約 5,000 万円) を所有することが必要です。募金はそのためのものとします。
5. 募金対象 ABK と兄弟寮に居住したことのある各国 (在日を含む) 留学生・技術研修生・日本人学生の OB/OG (約 1,000 人)、ABK 日本語コースの卒業生 (約 4,000 人)、及び ASCA の日本人職員・会員等 (約 1,000 人)、並びに本募金趣旨に賛同されるすべての皆様
6. 期 間 2012 年 4 月 1 日から 1 年間
7. 送金方法 次の 1)、2)、3) のいずれかの方法で、ご送金下さい。
 - 1) クレジットカード決済による送金 (下記ウェブサイトで手続きできます)
寄付のお申し込み <http://www.abk.or.jp/abkd/fund/fund.html>
*セキュリティ上の必要から、1 回の送金は上限 300,000 円 (参拾万円也) でお願いします。
 - 2) 銀行振込みによる送金 (下記銀行口座にお振り込み下さい)

銀行名	みずほ銀行 本郷支店
口座番号	普通預金 NO.2789045
口座名義	財団法人 アジア学生文化協会
住 所	東京都文京区本駒込 2-12-13 ☎ 03-3946-4121
 - 3) 郵便振替による送金

郵便振替口座	00150-0-56754
加入者名	財団法人 アジア学生文化協会

*振替用紙は「アジアの友」に挟み込まれています

お問合せ先：(財) アジア学生文化協会 50 周年記念事業委員会事務局

〒113-8642 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館

Tel.+81-3-3946-4121 Fax.+81-3-3946-7566 E-mail: asca50com@abk.or.jp